

茨城県筑西市

板 堂 遺 跡

—発掘調査報告書—

2 0 0 6

ヤシマ産業株式会社
筑西市教育委員会
山武考古学研究所

序

筑西市は、下館市・関城町・明野町・協和町の1市3町が合併し、平成17年3月28日に誕生しました。東京から北へ約70km、茨城県の西部に位置し、東西は約15km、南北は約20kmで、面積は205.35km²です。地形はおおむね平坦で、鬼怒川・小貝川などが南北に貫流し、肥沃な田園地帯を形成しています。

このたび、ヤシマ産業株式会社の倉庫新築工事にともない発掘調査を行った板堂遺跡は、五行川右岸台地上の折本地区に位置しており、周囲には板堂古墳や鷹の巣遺跡などの所在が知られ、古代から人びとの生活活動の場であったことを窺い知ることができます。

今回の調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡が3軒、平安時代の竪穴住居跡が4軒および古墳が2基確認され、当地域の文化の様相を解明する上で欠かすことのできない貴重な資料を得ることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解明する資料として広く活用されることを念願いたします。

最後になりましたが、今回の調査に際し多大なるご理解とご協力を賜りましたヤシマ産業株式会社、また発掘調査から報告書の作成に至るまでご尽力いただきました山武考古学研究所ならびに関係機関・関係各位に衷心より御礼申し上げ、報告書刊行の辞とさせていただきます。

平成18年3月

筑西市教育委員会
教育長 大泊 信雄

例　　言

1. 本書は、茨城県筑西市折本字板堂 536-2 外に所在する板堂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、ヤシマ産業株式会社の倉庫建設に伴って行われたもので、ヤシマ産業株式会社から委託を受けた山武考古学研究所が、筑西市教育委員会の指導のもとに行った。
3. 調査の概要については以下の通りである。

遺　跡　名　　板堂遺跡

所　在　地　　茨城県筑西市折本字板堂 536-2, 539-1, 540-5 番地

調　査　面　積　1,594 m²

調　査　期　間　平成 17 年 9 月 5 日～同年 10 月 3 日

調　査　担　当　者　高野浩之（山武考古学研究所所員）

4. 本書の執筆は、I を筑西市教育委員会が、II 以下を高野浩之（山武考古学研究所）が行った。編集は筑西市教育委員会の指導のもと高野が行った。
5. 調査に関わる遺物・図面・写真等の資料は、一括して筑西市教育委員会が保管している。
6. 調査及び本書の作成にあたり、下記の諸機関にご協力を賜った。記して感謝する次第である。

（順不同・敬称略）

ヤシマ産業株式会社　　奥原建設株式会社　　有限会社新成田総合社　　有限会社カワヒロ産業

7. 調査の参加者は以下の通りである。（順不同）

前橋廣男	荒川 博	五十嵐 隆	鈴木正弘	北原 隆	木幡 光	桑谷 守
齊藤三郎	青木みね子	飯泉利明	飯泉鉄夫	山崎智久	江尻幸子	根本己春
池野睦恵	滝口幸子					

凡　　例

1. 採図中に記載した北は座標北を示す。
2. 本遺跡の略称は「ITA」である。
3. 各遺構の略称は以下の通りとし、写真撮影、遺物注記等に用いた。
TM…古墳　SI…住居跡　SK…土坑　SD…溝　K…擾乱　S…石
4. 採図中で使用したスクリーントーン、記号は以下の通りである。

 粘土　 烧土・上器赤彩　 調査区・土器黑色處理

●土器・鉄製品　▲玉類

目 次

序

例言 凡例 目次

I.	調査に至る経緯	1
II.	遺跡の位置と歴史的環境	3
III.	試掘調査の概要	3
IV.	調査の概要	5
1.	調査の方法	5
2.	調査の経過	5
3.	基本堆積土層	5
V.	検出された遺構と遺物	7
1.	古墳	7
2.	古墳時代住居跡	15
3.	古代住居跡	19
4.	土坑	25
5.	溝	26
VI.	まとめ	27
抄録		

表 目 次

第1表	試掘調査トレンド一覧表	3	第6表	古墳時代住居跡出土遺物観察表	18
第2表	第1号墳出土遺物観察表(刀子)	13	第7表	古代住居跡一覧表	19
第3表	第2号墳出土遺物観察表(鉄製品)	13	第8表	古代住居跡出土遺物観察表	24
第4表	第2号墳出土遺物観察表(瓦類)	13	第9表	土坑一覧表	24
第5表	古墳時代住居跡一覧表	18	第10表	溝一覧表	26

挿 図 目 次

第1図	調査区域図(1/2500)	1	第9図	第2号墳	10
第2図	遺跡位置図1(1/25,000)	2	第10図	第2号墳主体部及び出土遺物	11
第3図	遺跡位置図2(1/25,000)	2	第11図	第2号墳出土遺物	12
第4図	試掘調査遺構確認状況図及び出土遺物	4	第12図	第3号住居跡及び出土遺物	14
第5図	基本堆積土層図	5	第13図	第3号住居跡出土遺物	15
第6図	遺構全体図	6	第14図	第5号住居跡及び出土遺物	16
第7図	第1号墳及び出土遺物	8	第15図	第7号住居跡及び出土遺物	17
第8図	第1号墳主体部	9	第16図	第1号住居跡	20

第17図 第2号住居跡	20	第21図 第4・6号住居跡出土遺物	23
第18図 第4号住居跡	21	第22図 土坑	25
第19図 第6号住居跡	21	第23図 溝上層断面	26
第20図 第1・2号住居跡出土遺物	22		

写真図版目次

- PL 1 1. 1区全景 2. 2区全景
- PL 2 1. 第1号墳全景 2. 同主体部確認状況 3. 同主体部全景 4. 同主体部全景
5. 同主体部側壁断面 6. 同主体部完掘全景 7. 第2号墳全景 8. 同主体部確認状況
- PL 3 1. 第2号墳主体部全景 2. 同主体部遺物出土状況 3. 同主体部遺物出土状況
4. 同主体部完掘全景 5. 第3号住居跡全景 6. 同遺物出土状況 7. 同遺物出土状況
8. 同跡蔵穴内遺物出土状況
- PL 4 1. 第5号住居跡全景 2. 同遺物出土状況 3. 同遺物出土状況 4. 第7号住居跡全景
5. 第1号住居跡全景 6. 同カマド近景 7. 第2号住居跡全景 8. 第4号住居跡全景
- PL 5 1. 第6号住居跡全景 2. 同遺物出土状況 3. 同カマド1近景 4. 同カマド2近景
5. 第8号土坑全景 6. 第16・17号土坑全景 7. 第3・4号溝全景 8. 第7号溝・19号土坑全景
- PL 6 出土遺物1
- PL 7 出土遺物2
- PL 8 出土遺物3

I. 調査に至る経緯

平成17年5月、ヤシマ産業株式会社から、筑西市折本字板堂536-2ほかにおける倉庫新築工事にともない、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて（照会）」が提出された。

照会に基づき、市教育委員会が同社の立会いのもとに現地踏査を行ったところ、開発予定地の全域にわたり遺物の散布を認めた。この結果、同社より同年6月15日付けで「遺跡発見の届出について」が提出され、板堂遺跡（市町村遺跡番号206073）として登録された。

市教育委員会は、現地踏査の結果を踏まえ、同社に対して開発予定地の試掘調査を必要とする旨の回答を行い、同年7月19日から3日間の日程で試掘調査を実施した。試掘調査の結果、堅穴住居跡7軒、溝状遺構7条など遺構と遺物を確認したことから、遺跡の取り扱いについて再度協議を行なった。協議において、工事の設計変更が困難であるため、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

市教育委員会とヤシマ産業株式会社は協議により、発掘調査の実施に向けて具体的な内容の調整を図り、調査を山武考古学研究所に委託することとした。その結果、ヤシマ産業株式会社、市教育委員会、山武考古学研究所の三者により調査を円滑に進めるための協定を締結するとともに、山武考古学研究所より同年8月31日付けで「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が提出された。調査経費についてはヤシマ産業株式会社が全額負担し、市教育委員会の指導のもと、山武考古学研究所が同年9月5日から10月3日まで発掘調査を行なった。



第1図 調査区域図 (1/2,500)



第2図 遺跡位置図1 (1/25,000)



第3図 遺跡位置図2 (1/25,000) 明治19年測量迅速図

II. 遺跡の位置と歴史的環境

板堂遺跡の所在する筑西市は、栃木県境に接する茨城県西部にあって、平成17年3月に4市町（下館市・閑城町・明野町・協和町）の合併によって誕生した。合併後の市域は東西約15km、南北約20km、面積は205.35km²と広大である。北は栃木県、南はつくば市と接し、東は桜川市、西は鬼怒川を挟み結城市、八千代町と接する。板堂遺跡が所在する旧下館市の地形は、東に小貝川、西に鬼怒川、中央に五行川が南北に流れ、流域には広大な沖積低地が広がる。これら河川間に栃木県から真岡線沿いに細長く延びる台地、旧協和町に接する台地、鬼怒川東岸の旧閑城町に至る台地がある。板堂遺跡は、栃木県二宮町から五行川に沿って南北に延びる細長い台地上にあり、複雑に入り組んだ小支谷が遺跡の両側に入り込むことで形成された舌状台地南側縁辺部に立地している。

市内の遺跡は、河川沿いに多くの遺跡が分布している。縄文時代は、前期の下江連地区十二天遺跡、中期の前原遺跡、大関遺跡、後晩期の外塚遺跡、弁天遺跡等がある。弥生時代は、標識遺跡となった女方遺跡が有名である。古墳時代は、旧協和町小栗地内の土塚古墳群、守山古墳群があり、多数の直刀、副葬品等が出土している。板堂遺跡の南方300m地点にある八丁台遺跡では川原石小口積みの主体部を有する古墳が検出されている。また、鬼怒川流域には女方古墳群、弁天古墳群が所在する。集落では中期末から後期初頭の野殿深作遺跡がある。奈良・平安時代は、旧協和町に新治郡衙・新治庵寺が置かれ、鬼怒川の対岸では峰崎遺跡、下り松遺跡といった大規模な集落が見られる。

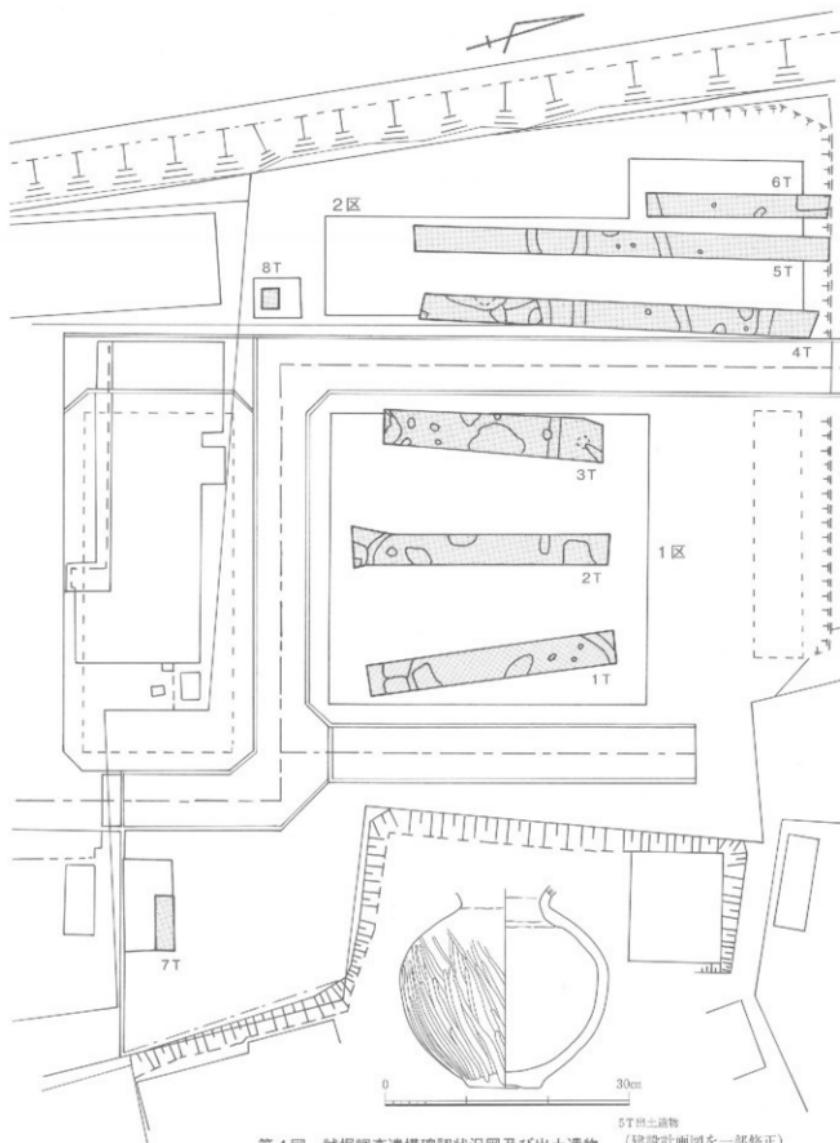
III. 試掘調査の概要

試掘調査は、倉庫建設区域2地点、防火水槽設置区域2箇所に8本のトレチ子を設定し遺構の有無を確認した。トレチ子は「T」の記号を付して記録している。各トレチ子の内容については第1表に記した。倉庫建設区域の南側は、工場施設が現存したために、5~8m程北側へ設定をずらして確認を行う。

調査の結果、倉庫建設区域（1~6T）では、住居跡8軒、土坑9基、ピット12基、溝4条が確認された。防火水槽設置区域（7~8T）では、ハードローム層を切り込んでかなりの深さまで搅乱を受け、遺構は確認されなかった。その後行った本調査によって、1T南側で重複すると考えられた住居跡は溝、1T北側溝は古墳の周溝、4Tの住居跡は5Tの溝と接続して古墳の周溝である事などが判明し、各遺構の数が試掘調査時とは増減するが、概ね調査の成果は得られた。出土した遺物は古墳時代の土器器片が主体で、5T南端の木根の下から古墳時代前期の小型漆が出土している。1~2両調査区の南側は工場施設撤去後に確認を行ったが、天地返しを受けて確認面下まで破壊されており、遺構の確認は不可能な状況であった。

第1表 試掘調査トレチ子一覧表

トレチ 番 号	規格 (m) 長さ×幅 (m)	面積 (m ²)	深度 (cm)	検出遺構	出土遺物	備考
1T	25.2 × 3	75.6	37~40	竪穴住居跡3軒、ピット3基、溝1条、風洞木版1	土器器	
2T	26.2 × 3	78.6	38~56	竪穴住居跡2軒、土坑2基、溝1条、風洞木版2	なし	
3T	22.3 × 3	66.9	30~51	竪穴住居跡1軒、土坑4軒、ピット3基、溝1条、風洞木版3	土器器	溝は4T~5Tへ連続する。
4T	50.2 × 2	100	40~45	竪穴住居跡1軒、土坑2基、ピット2基、溝4条、風洞木版1、不明2	土器器	溝は3T~6Tへ連続する。
5T	42.2 × 2	84.4	30~52	土坑1基、ピット3基、溝3条	土器器	溝は3T~6Tへ連続する。
6T	18.2 × 2	36.4	31~42	竪穴住居跡1軒、土坑1基、ピット1基、溝1条	土器器	溝は4T~5Tへ連続する。
7T	2 × 2	3	92	なし	なし	全体に搅乱
8T	5.5 × 2	8.25	50~70	なし	土器器	全体に搅乱



IV. 調査の概要

1. 調査の方法

調査は、先に行われた試掘調査を基に、倉庫建設が予定されている2地点全域を調査区とし、東側を1区、西側を2区として区別した。

表土除去は重機を用いて遺構確認面まで慎重に掘り下げ、遺構確認及び遺構の掘り下げは人力で行った。測量は世界測地系より求めたX軸=+39,260m、Y軸=-12,260mを基準とし、調査区全体を網羅する10m×10mのグリッドを設定した。グリッドは北から南へはアルファベット、西から東へは算用数字で表し、「A1, A2, A3, ...」と呼称し、実測及び遺物取り上げの基準とした。実測は住居跡、土坑は1/20縮尺、住居跡カマド及び炉、古墳主体部は1/10縮尺、溝・周溝等は1/40縮尺をそれぞれ用いた。写真は35mm判白黒フィルム、同判カラーリバーサルフィルムを使用し、必要に応じて6×7判白黒フィルムを併用した。写真撮影の記録は35mm判白黒フィルムに写し込んだ。実測及び写真撮影は調査の過程で随時行った。

2. 調査の経過

9月5日 調査開始、重機及び施設・発掘器材搬入。1区より表土除去開始。

8日 1区表土除去終了。この日より作業員を投入し、1区遺構確認を開始。併せて2区表土除去を開始。

9日 1区遺構確認を終了。遺構確認状況写真撮影後、遺構の掘り下げを開始。住居跡の掘り下げから行う。

10日 1区1号墳の主体部調査を開始。2区表土除去終了。重機撤出。

12日 基準点測量、併せてグリッド杭・水平点の設置。重複住居跡を再確認し、溝であることが判明する。

15日 1号墳主体部より遺物出土。1・2・4・6号住居跡はカマド調査を開始。

16日 3・4号溝掘り下げ開始。各住居跡の床・壁の精査作業。

19日 1号墳主体部のベルト除去、石室内精査。3号住居跡の貯蔵穴掘り下げ。出土遺物確認。

20日 2区遺構確認作業開始。遺構確認状況写真撮影終了後、2号墳の主体部調査を開始。

21日 2区遺構の掘り下げ開始。1区各住居跡の写真撮影。

27日 1区住居跡の調査を終了。1・4号溝の掘り下げ。

28日 1分墳主体部を完掘。2区住居跡の床・壁精査。5~7号溝掘り下げ。

30日 2区住居跡の調査を終了する。16・17号土坑掘り下げ。

10月1日 1区全体写真撮影。2号墳主体部を完掘。

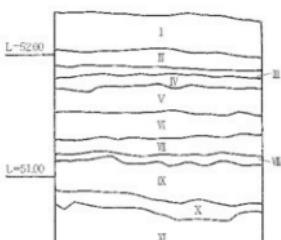
3日 2区全体写真撮影。終了確認。施設・発掘器材搬出。現地発掘調査を完了する。

3. 基本堆積土層

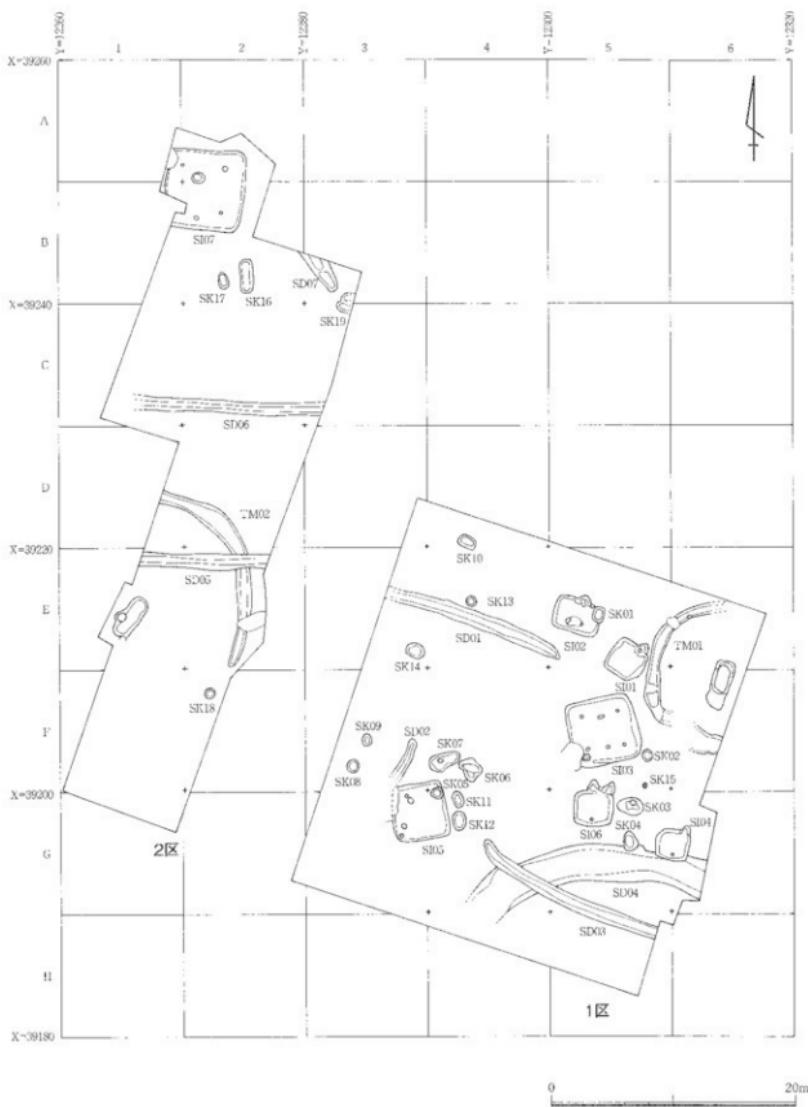
基本堆積土層は1・2両調査区のほぼ中央地点にあたるE5

グリッド付近で2×2m四方の試掘坑を設定し、観察を行った。

基本層序	層名	特徴
I	赤褐色土	7.5YR3/3 表上、腐植土。しまり弱い。粘性なし。
II	黒褐色土	7.5YR3/2 表上。しまりなし。粘性なし。
III	暗褐色土	7.5YR3/3 ローム質、ロームゴロック少傾。しまりなし。粘性なし。
IV	暗褐色土	7.5YR3/4 上面遺構確認面。ローム直上の漏移層。
V	褐色土	7.5YR4/4 ロームやや軟質。しまりあり。粘性あり。
VI	褐色土	7.5YR4/3 ハードローム。しまり強い。粘性あり。
VII	暗褐色土	7.5YR3/4 しまりあり。粘性あり。
VIII	暗褐色土	7.5YR3/4 ローム混入。しまりあり。粘性あり。
IX	褐色土	7.5YR3/4 岩礎上微弱。しまり強い。粘性弱い。
X	明褐色土	7.5YR5/8 露頭少々。しまり弱い。粘性強い。
XI	棕褐色土	7.5YR6/8 砂粒上。底削上。しまりあり。粘性なし。



第5図 基本堆積土層図



第6図 遺構全体図

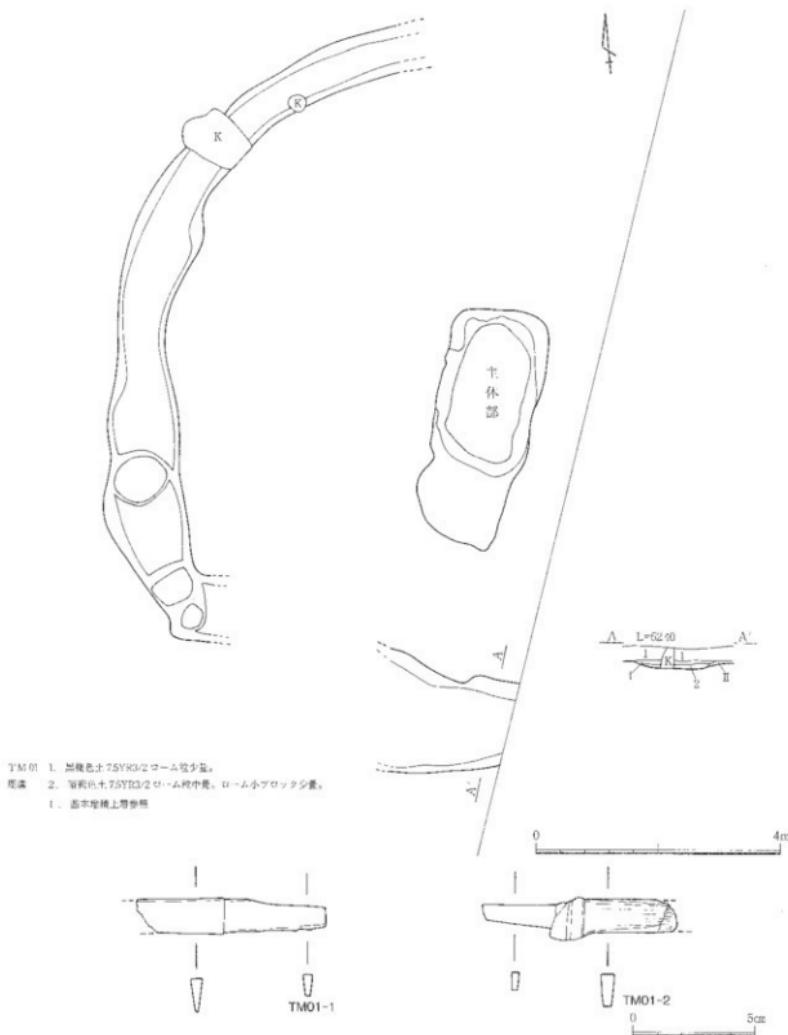
V. 検出された遺構と遺物

1. 古墳（第7~11回）

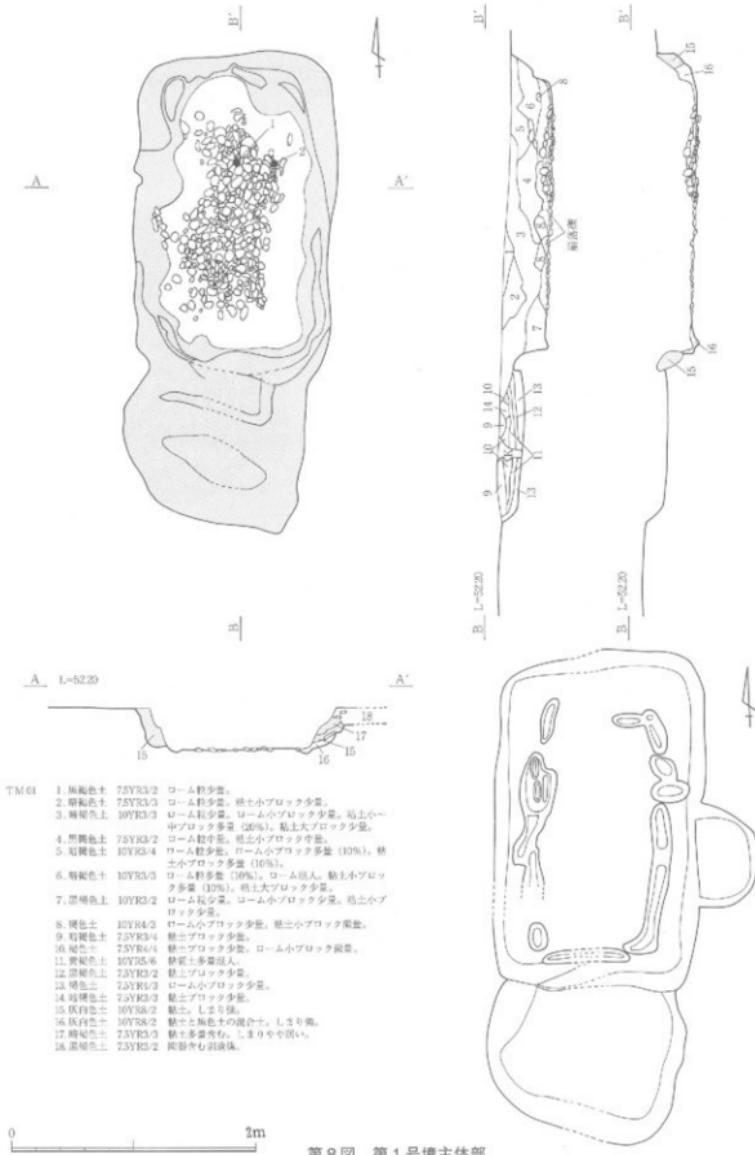
1・2両区で各1基の古墳を確認する。両古墳とも墳丘は消滅しており、周溝の一部と主体部を確認する。第1号墳は1区の北東側、E 5・6、F 5・6グリッドに位置する。本墳の規模は、東側が調査区外となり1/2の確認に留まるが、周溝内側の立ち上がり部分からの径約10.1mの円墳と推測される。周溝は上面の大部分が削平され、底面が確認されるのみであった。確認し得る規模は、削半が著しい北側で上幅0.72~0.78m、底幅0.41~0.47m、深さ6cm、最も遺存の良い南側で上幅1.54~2.00m、底幅1.06~1.82m、深さ10cmで、断面形状は逆台形を呈したものと思われる。主体部は、本墳のほぼ中央に位置するものと思われ、主軸はN=15°-Eを示す。上部は削平を受けているが、玄室と思われる掘り込みを確認したほか、玄室南側では済造部分にあたると想われる粘土の広がりが確認された。玄室は、長さ2.76m、幅1.71m、現存する深さ34cmの箱形を呈し、掘り方内に粘土主体の土が壁面全体に接着している。覆土中には長さ30~50cm程の小石が含まれていることから、これら的小石を用いて石室を構築していたものと推測される。床面は大きさ7~12cm程の扁平な川原石を選りすぐり、掘り込んで平坦にしたローム面に直に敷き詰めて平坦面を構築している。石室中央から北側で床上に川原石を積み上げて10cm程高くした高まりがあり、石枕としての機能を果たしたものと考えられる。床下は平坦なローム面で、壁から9~16cm程内側で小溝状又は楕円形状の浅い掘り込みが北壁側を除き巡っている。溝状の掘り込みはきれいな線状を呈さず、幅9~30cmと差があり底面も凹凸が激しく、分断される部分もあることから、楕円形状の掘り込みと併せて石積みの基底部となる掘り込みと思われる。出土遺物は刀子2点が出土し、2点とも石枕の機能を有したと思われる高まりの上面で出土している。石室内からは覆土中及び床下より若干の土器片が出土するが時期決定には至らない。周溝内からは古墳時代前期と思われる器台の一部が出土するが周辺住居跡からの流れ込みと思われる。

第2号墳は2区の南側、D 1・2、E 1・2グリッドに位置する。本墳の北側を第5号溝が分断し周溝の一部を壊しているが、底面までには及んでいない。本墳の規模は、西側が調査区外となるほか、本來はF 1・2グリッド地点まで広がっていたと考えられる部分が削平されているため、1/4程度の確認に留まるが、主体部を中心として見た場合、周溝内側の立ち上がり部分からの径は約18m前後の円墳であったと推測される。周溝の規模は、上幅1.16~1.22m、底幅0.46~0.94m、深さ13~19cmで、断面形状は逆台形を呈する。周溝北東側で、上幅1.80m、底幅1.24mと一部広がる部分が見られるが木根による搅乱が影響したものと考えられる。東側では他より7~13cm程深くなる部分が認められる。主体部は、本墳のほぼ中央に位置し、主軸はN=44°-Eを示す。上部は削平を受けているが、玄室と思われる掘り込みが確認されている。玄室は、北東側が木根により搅乱を受け、正確な長さは不明であるが、長さ3.00m、幅1.73mの規模と推測される。現存する深さ20cmの掘り方で、形状は平面形が長方形で長軸方向に若干の膨らみを見せている。断面形状は箱形を呈し、掘り方内に粘土主体の土が壁面に接着している。南西側壁面では、長さ20~22cmの石が内側に差し込む形で確認されているが。同様の石は覆土中にはほとんど含まれていない。床面は、掘り込んで平坦にしたローム面に直に2cm弱の小石を全体に敷き詰め、さらに上面に5cm以内の小石を敷き詰めて平坦面を構築している。床下は平坦なローム面で、壁から14~18cm程内側の西壁側で小溝状の、東壁側で楕円形状の浅い掘り込みが確認される。溝状の掘り込みはきれいな線状を呈さず、幅10~14cm、底面は凹凸が見られる。第1号墳と同様、楕円形状の掘り込みと併せて石積みの基底部となる掘り込みと思われる。出土遺物は、床下より出土した鉄製耳環1点、玉類は、大小の管玉4点、臼玉1点、蚕玉1点、小玉32点、丸玉2点が出土

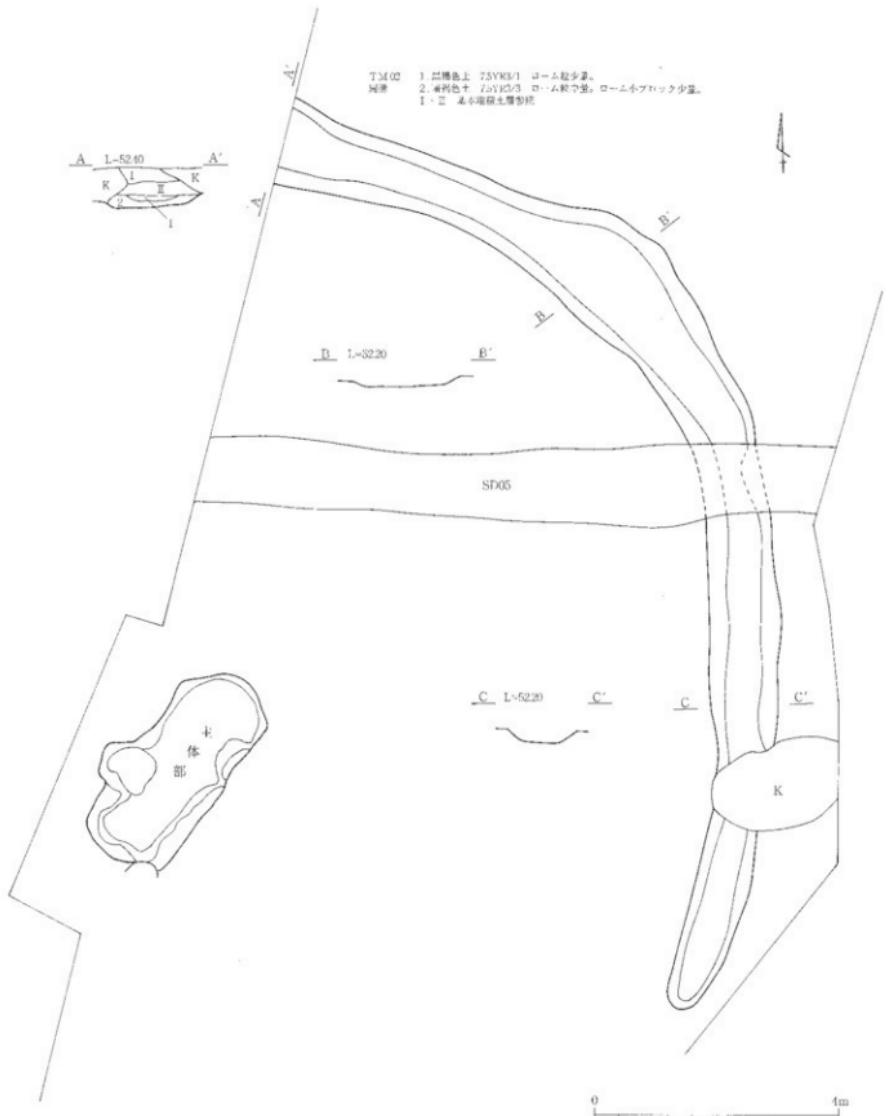
している。出土位置が確認できたのは、耳環と管玉の一部、臼玉で、小玉・丸玉等は籠によって採取したものである。



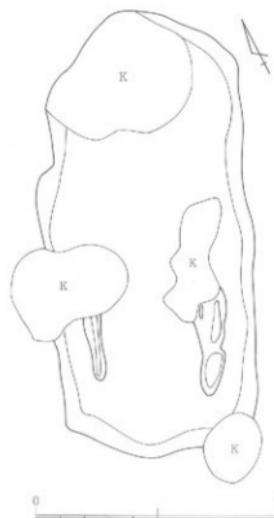
第7図 第1号埴及び出土遺物



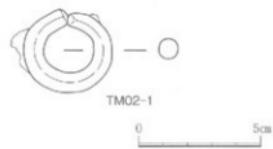
第8図 第1号墳主体部



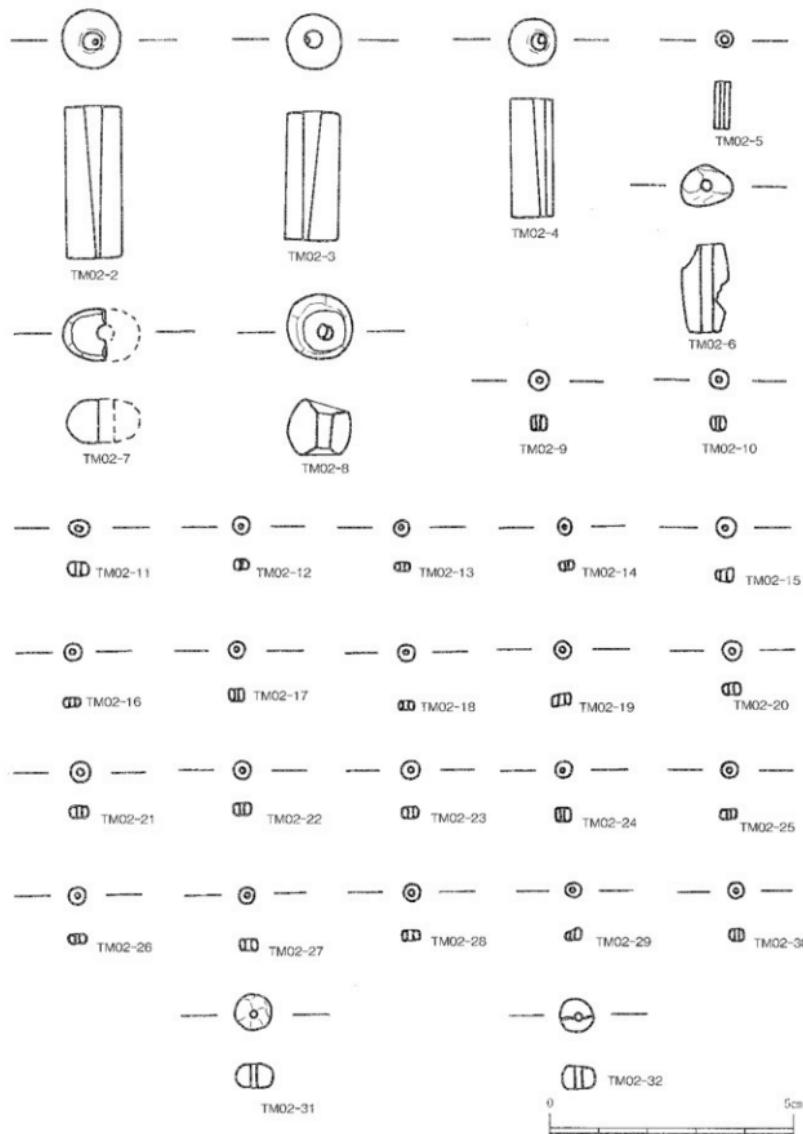
第9図 第2号墳



- TM 02
 1. 黄褐色土 7SYR3/4 ローム粒少量。水理による漂示と想われる。
 2. 黄褐色土 10YR3/4 粘土小～中ブロック少量。
 3. 石開色土 10YR3/4 粘土中～大ブロック多量(20%)。
 4. 開色土 10YR4/6 粘土中～大ブロック多量(40%)。
 5. 灰褐色土 10YR3/3 粘土小ブロック多量(30%)。
 6. 灰褐色土 10YR3/3 粘土小ブロック微量。ローム粒少量。
 7. 黑色土 10YR4/6 ローム粒少量。
 8. 灰白色土 10YR8/2 粘土と墨色の混合土。しまり強。



第 10 図 第 2 号墳主体部及び出土遺物



第 11 図 第 2 号填出土遺物

第2表 第1号墳出土遺物観察表(刀子)

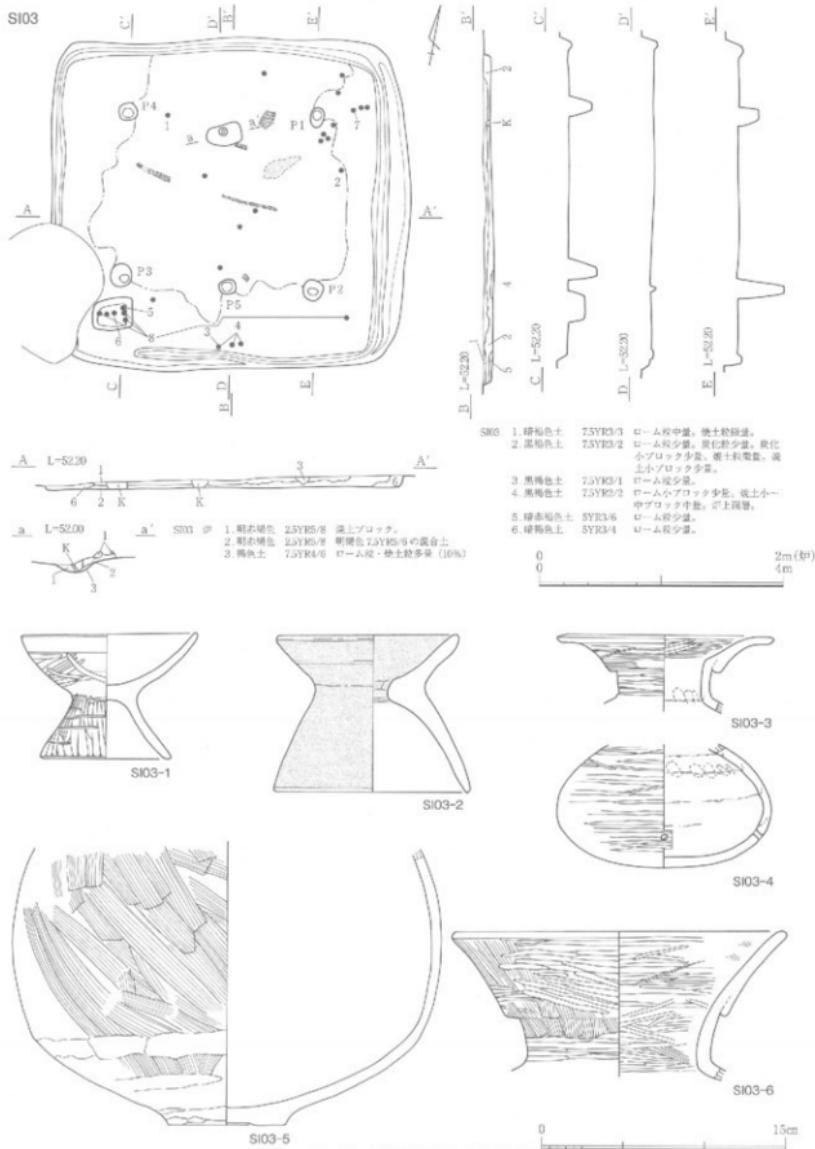
遺物番号	全長	刀部			茎部		遺存度	国版番号	(cm)
		長さ	幅	重ね	長さ	幅			
TM01-1	(7.7) (3.50)	1.49	0.50	(4.20)	1.30	0.50	1／2残存	第7回	
TM01-2	(8.0) (2.90)	0.80	0.30	(5.10)	1.30	0.55	1／2残存	第7回	

第3表 第2号墳出土遺物観察表(鉄製品)

遺物番号	外径	内径	断面形	重さ(g)	遺存度	国版番号	(cm)
TM02-1	3.41～3.60	1.9～2.1	0.8	23.05	完形	第10回	青銅・鉄製

第4表 第2号墳出土遺物観察表(玉類)

遺物番号	材質	長さ	径 (たて×よこ)	厚さ	孔徑	重さ(g)	色調	遺存度	国版番号	備考
TM02-2	碧玉	31.0	11.0 × 12.0	-	3.0～1.0	8.23	深緑色	完形	第11回	管玉
TM02-3	碧玉	26.0	11.0 × 11.0	-	3.0～1.0	6.35	深緑色	完形	第11回	管玉
TM02-4	碧玉	24.0	11.0 × 10.0	-	2.5～1.0	3.48	深緑色	完形	第11回	管玉
TM02-5	碧玉	10.0	3.5 × 3.5	-	1.0～1.0	0.12	濃緑色	完形	第11回	管玉
TM02-6	琥珀	18.0	最大幅 11.0	7.0	2.0～2.0	0.84	青白褐色	一部欠損	第11回	蜜玉
TM02-7	琥珀	8.8	最大幅 -	-	-	0.49	暗赤褐色	不明	第11回	翠丸あり
TM02-8	滑石	-	13.0 × 13.0	11.0	2.5～2.5	2.81	灰白色	完形	第11回	白玉
TM02-9	ガラス	-	4.0 × 4.0	4.0	1.0～0.7	0.05	青緑色	完形	第11回	小玉
TM02-10	ガラス	-	4.0 × 4.0	4.0	0.9～0.7	0.05	青緑色	完形	第11回	小玉
TM02-11	ガラス	-	3.0 × 4.0	3.0	1.5～1.0	0.04	青緑色	完形	第11回	小玉
TM02-12	ガラス	-	3.5 × 3.5	3.0	1.0～0.7	0.06	青緑色	完形	第11回	小玉
TM02-13	ガラス	-	3.5 × 3.5	1.5	0.8～0.5	0.01	青緑色	完形	第11回	小玉
TM02-14	ガラス	-	3.5 × 3.0	2.0	0.8～0.5	0.01	青緑色	完形	第11回	小玉
TM02-15	ガラス	-	4.0 × 4.0	3.0	1.0～1.0	0.04	青緑色	完形	第11回	小玉
TM02-16	ガラス	-	3.5 × 3.5	2.0	1.0～1.0	0.01	青緑色	完形	第11回	小玉
TM02-17	ガラス	-	4.0 × 4.0	3.0	1.0～0.8	0.03	青緑色	完形	第11回	小玉、不透明
TM02-18	ガラス	-	4.0 × 4.0	2.0	1.0～1.0	0.01	青緑色	完形	第11回	小玉、不透明
TM02-19	ガラス	-	3.5 × 3.5	2.5	1.0～1.0	0.01	青色	完形	第11回	小玉
TM02-20	ガラス	-	4.0 × 4.0	3.0	1.0～1.0	0.05	水色	完形	第11回	小玉
TM02-21	ガラス	-	4.0 × 4.0	3.0	1.0～0.8	0.04	群青	完形	第11回	小玉
TM02-22	ガラス	-	4.0 × 4.0	3.0	1.0～0.6	0.05	群青	完形	第11回	小玉
TM02-23	ガラス	-	4.0 × 4.0	2.0	1.0～0.8	0.04	群青	完形	第11回	小玉
TM02-24	ガラス	-	4.0 × 4.0	3.0	1.0～0.8	0.04	群青	完形	第11回	小玉
TM02-25	ガラス	-	3.5 × 3.0	2.0	1.0～0.6	0.01	群青	完形	第11回	小玉
TM02-26	ガラス	-	4.0 × 4.0	2.0	1.0～0.8	0.01	群青	完形	第11回	小玉
TM02-27	ガラス	-	3.5 × 3.5	2.5	1.0～1.0	0.01	群青	完形	第11回	小玉
TM02-28	ガラス	-	3.5 × 3.5	2.0	1.0～1.0	0.01	群青	完形	第11回	小玉
TM02-29	ガラス	-	3.0 × 3.0	2.0	1.0～0.8	0.01	群青	完形	第11回	小玉
TM02-30	ガラス	-	3.0 × 3.0	2.0	1.0～0.7	0.01	群青	完形	第11回	小玉
TM02-31	土質	-	7.5 × 7.0	5.0	1.0～1.0	0.27	黒色	完形	第11回	丸玉、表面磨擦
TM02-32	土質	-	6.5 × 7.0	5.0	1.5～1.5	0.21	褐色	完形	第11回	丸玉



第12図 第3号住居跡及び出土遺物

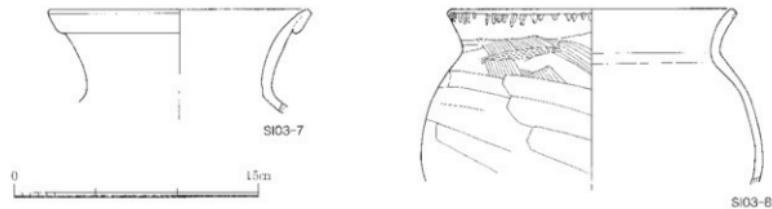
2. 古墳時代住居跡（第12図～第15図）

古墳時代の住居跡は1区で第3・5号住居跡の2軒、2区で第7号住居跡の1軒が確認されている。いずれも古墳時代前期のものと考えられるが、規模、主軸等に若干の差異が窺える。規模等各住居跡の詳細については第5表に記した。

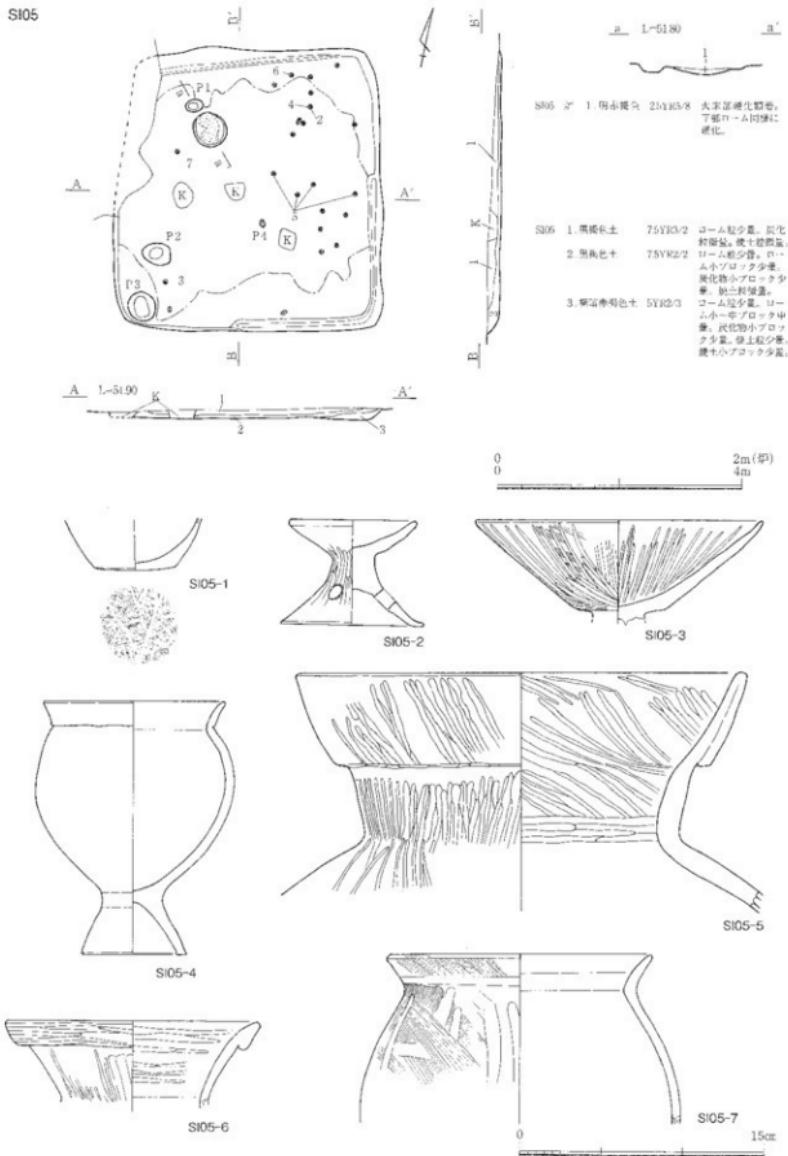
第3号住居跡は方形を呈し、主軸方向はN-14°-Wを示す。南西隅から西壁中央にかけて木根による搅乱を受けている。覆土中には焼土及び炭化物が含まれ、焼失家屋と判断される。床直上には炭化した丸太材や板が出土するが、炭化材の出土量はわずかで上屋構造を推測するには至らない。床面は平坦で柱穴から北壁にかけて硬化し、壁溝はほぼ全周する。主柱穴は4本で住居対角線上にはほぼ均一に配される。炉は北壁寄りP1・4間に位置し掘り込みは非常に浅い。P2・3間にP5は出入り口施設と考えられる。貯蔵穴は南西隅にあり、平面は長方形を呈する。遺物の出土状態はP1及びP5周辺の床直上にややまとまって出土する傾向が見られる。SI03-2は粗製の器台である。炉付近から出土していることから、炉器台として使用された可能性がある。貯蔵穴からはSI03-5・6・8の遺物がまとまって出土している。

第5号住居跡は方形を呈し、主軸方向はN-14°-Wを示す。西壁から南西壁中央にかけて風倒木による搅乱を受けている。覆土中、特に壁際で焼土が多く含まれ、焼失家屋と判断されるが、炭化物はほとんど確認されていない。床面は平坦で住居内全体に良く硬化し、壁溝はほぼ全周する。主柱穴は確認されず、出入り口施設も確認されなかった。南隅で焼土が多量に含まれるP3を確認するが、貯蔵穴とするには規模の点で難があるため、性格は捉えられない。炉は西隅寄りに位置し、掘り込みは非常に浅いが火床部の残りが良好であった。遺物の出土状態は北東壁寄りにややまとまって出土している。その内の大部分がSI05-5の折り返し口縁壺の胴部片である。

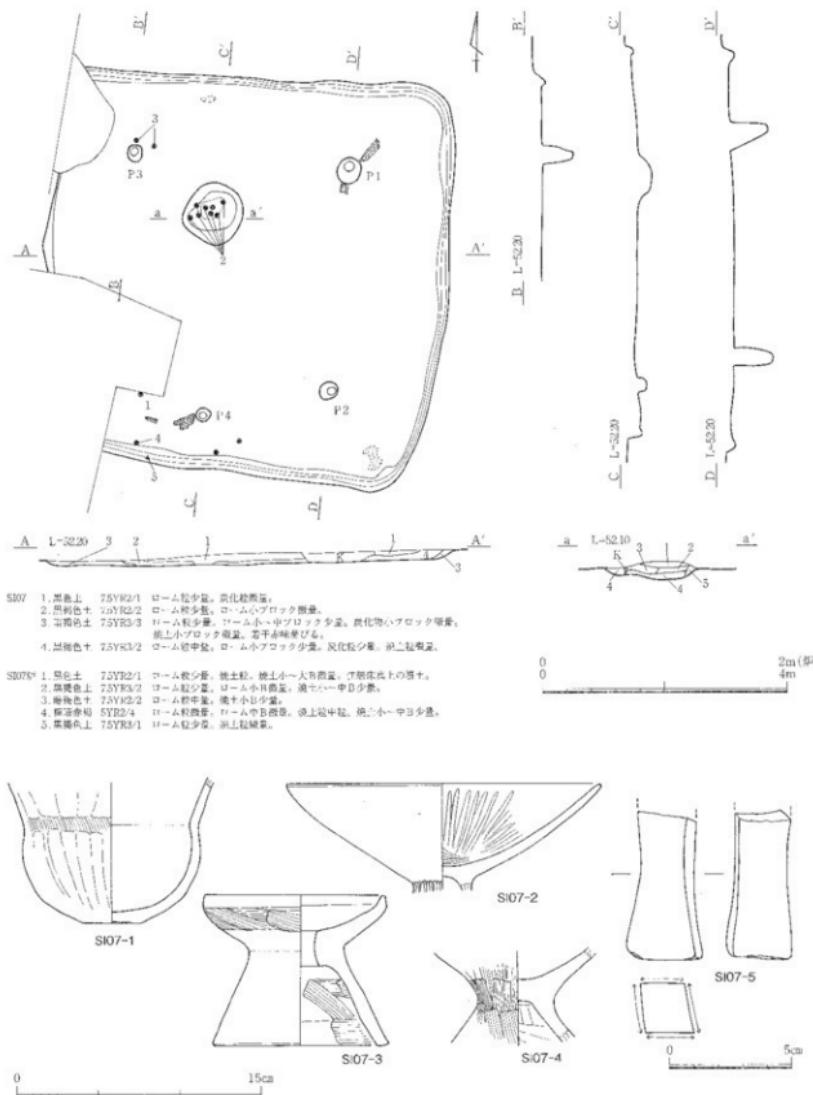
第7号住居跡は方形を呈し、主軸方向はN-5°-Eを示す。北西隅から西壁中央にかけてと床面の一部が木根による搅乱を受けている。また南西隅は未調査となっている。覆土中には焼土及び炭化物が含まれ、焼失家屋と判断される。床直上には焼土及び炭化した板材が出土するが、出土量は極端である。床面は平坦であるが、第3・5号住居跡と比べて全体に軟弱の感がある。被熱のためか、炭化材出土地点直下のP1周辺と南壁際の一部で硬化しているのが確認されており、本来は硬化面の範囲は全体に広がっていたものと推測される。壁溝はほぼ全周する。確認した主柱穴は3本であるが調査区外に1本遺存するものと考えられる。各柱穴は住居対角線上にはほぼ均一に配される。炉は住居中央のP3寄りに位置し、掘り込みは非常にしっかりとされている。P4は南壁際中央やや西寄りにあり、出入り口施設と考えられる。貯蔵穴は確認されなかつたが木削部分の南西隅に遺存するものと考えられる。遺物の出土状態は、南側壁際でややまとまる傾向が見られるがさほど多くはない。SI07-3は粗製の器台で炉北側のP3付近で出土している。SI07-1・4・5は南壁際で出土したものである。



第13図 第3号住居跡出土遺物



第14図 第5号住居跡及び出土遺物



第15図 第7号住居跡及び出土遺物

第5表 古墳時代住居跡一覧表

遺構番号	位姿 グリッド	平面形	主軸方向	层根 (m)		柱穴模様 (径・深さ cm)					火焔	蓄糞穴	備考	
				東西	南北	堆高	P1	P2	P3	P4	P5			
第3号住居跡	P5	方形	N-14°-W	5.38	5.83	0.17	31・32	33・37	37・48	33・48	25・8	如	南内側	
第5号住居跡	F3・4 G3・4	方形	N-14°-W	4.29	4.65	0.11	47・53	48・10	27・6			如	なし	
第7号住居跡	A1・2 B1・2	方形	N-3°-E	6.44	(6.70)	0.13	42・61	33・65	29・60	26・15	96・22	如	不明	市西側部分未調査

第6表 古墳時代住居跡出土遺物観察表

遺物番号	器種	法量: ①口徑 ②底径 ③器高	胎土・色調・洗成・造作痕	特徴	備考
SI03-1	土師器・器台	① 10.4 ② 7.6 ③ 7.6	微砂粒・石英・灰褐色・良好・完形	外面磨き。胸部縦位へラ削り後磨き。	内外面は押部内面を施す磨き。
SI03-2	土師器・器台	① 10.9 ② 11.8 ③ 19.6	微砂粒・細繩・にい・褐色・佳好・完形	内外面ナラ。	
SI03-3	土師器・小型壺	① 13.2 ② - ③ (4.7)	微砂粒・明赤褐色・良好・口縁・頭部	外筒・内面口縁まで丁寧な磨き。	SI03-4と同一。
SI03-4	土師器・小肚壺	① - ② - ③ (7.5)	微砂粒・明赤褐色・良好・頭部	外筒丁寧な磨き。瓶下部に透3mm孔。	SI03-3と同一。
SI03-5	土師器・壺	① - ② 7.0 ③ 16.9	細砂粒・灰石・石英・深褐色・普通・1/2	外面磨毛目。	貯藏穴内出土。
SI03-6	土師器・壺	① 20.0 ② - ③ (9.1)	石英粒・チャート焼・にい・褐色・頭部	外面内面磨き。横口口縁で外反。	貯藏穴内出土。
SI03-7	土師器・壺	① 17.0 ② - ③ (10.9)	微砂粒・外腹は灰による施褐色・内面は灰褐色・普通・1/2	外面・網毛目調整後、頭部はヘラ削り。口部外側面に削み目。	
SI03-8	土師器・壺	① (15.3) ② - ③ (6.3)	微砂粒・灰褐色・良好・口縁部	折り返し窓口縁。外反。	貯藏穴内出土。
SI05-1	土師器・小型鉢 形十輪	① - ② 4.7 ③	微砂粒・にい・褐色・良好・底部	外筒ナラ。内面丁寧なナラ。底部不整。	
SI05-2	土師器・器台	① 8.6 ② 8.7 ③ 6.4	微砂粒多量・にい・褐色・良好・頭部・完形	受け口部の外筒ナラ・内面黒化。頭部外側面磨き	
SI05-3	土師器・高杯	① (17.5) ② - ③ -	灰石粒・石英粒・明赤褐色・やや良好・頭部欠損	杯部内外面端縁位の崩さ。凸接合。	
SI05-4	土師器・台付壺	① 11.1 ② 6.3 ③ 15.5	微砂粒・にい・褐色・良好・ほほん形	外筒ナラ・押さえ調整。内面ヘラナラ。	
SI05-5	土師器・壺	① 27.6 ② - ③ (14.6)	灰石粒・石英粒・にい・褐色・良好・1/4以上修復	外筒口縁で内湾汽水味。	
SI05-6	土師器・壺	① (15.6) ② - ③ -	黄白色微粒・にい・黄褐色・良好・口縁部	外西口縁位磨き。頭部縦位へラナラ削り後磨き。内面横位磨き。横口口縫	
SI05-7	土師器・壺	① (16.0) ② - ③ -	微砂粒・にい・褐色・良好・口縁部	外西刷毛目調整後・口縁傾力向ヘラナラ・頭部縦位方向ヘラナラ。	
SI07-1	土師器・壺	① - ② 3.6 ③ (8.6)	微砂粒・にい・褐色・良好・1/3	外西刷毛目調整後・縫位ヘラナラ。	
SI07-2	土師器・高杯	① (19.2) ② - ③ (6.7)	長石粒・石英粒・赤褐色・普通・底部2/3	杯部外側ヘラナラ。内面磨き。	
SI07-3	土師器・器台	① 10.7 ② 10.6 ③ 9.3	微砂粒・にい・褐色・普通・完形	外筒ナラ・受け口部刷毛目調整後ナラ。頭部内面磨毛目。	
SI07-4	土師器・器台	① - ② - ③ -	長石粒・石英粒・赤褐色・良好	内外面磨毛目	
SI07-5	砾石	長さ6.0・幅2.6・厚さ2.8	材質: 流紋岩		中央部で折損。

3. 古代住居跡（第16図～第21図）

古代の住居跡は1区で第1・2・4・6号住居跡の4軒が確認される。配置傾向は調査区の東側に集中して見られ、第1・2号住居跡と第4・6号住居跡がそれぞれ近接している。いずれも9世紀代後半から10世紀代前半の範囲に収まるものと考えられる。規模等、各住居跡の詳細については第7表に記した。

第1号住居跡は方形を呈し、カマド位置を中心とした主軸方向はN-39°-Eを示し、他の住居と比べて傾きが大きい。床面は平坦であるがカマド前面で若干縛まりが強いほかは硬化する部分が見られず、木根等の搅乱を受けているためか全体に軟弱である。壁溝は北東壁側を除いて全周する。ピットは確認されなかつた。カマドは北東壁東寄りにある。カマド袖部分の遺存は良くないが、両袖部分では片岩を用いて構築の補強にあてている。火床部の掘り込みは深く、前面にかけて炭化物の堆積が見られた。遺物の出土状態はカマド周辺にまとまる傾向にある。

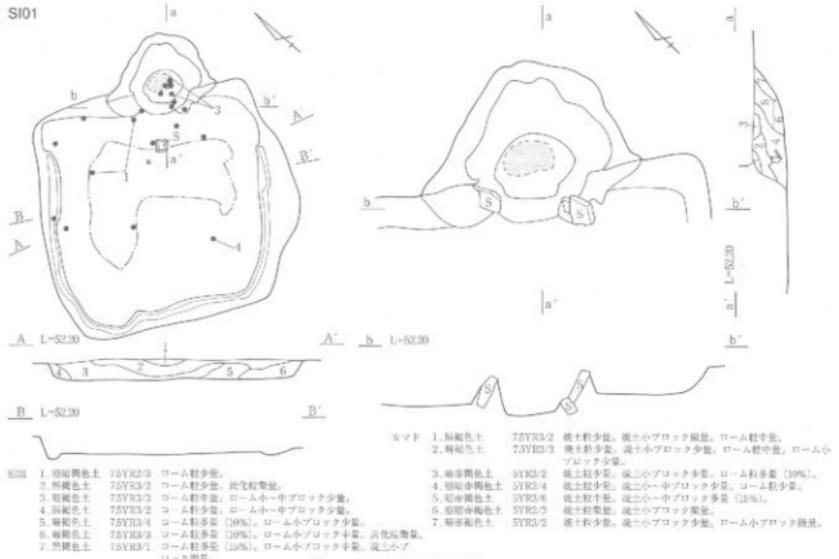
第2号住居跡は東西に長い長方形を呈し、カマド位置を中心とした主軸方向はN-18°-Eを示す。北東隅から東壁にかけて第1号土坑と重複し、本跡が壊されている。床面は住居中央の南寄りで木根による搅乱を受けている。全体は平坦で、カマド前面と住居中央部分で若干縛まりが強いほかは硬化する部分が見られず木根等の搅乱を受けているためか全体に軟弱である。壁溝はほぼ全周する。ピットは確認されなかつた。カマドは北壁ほぼ中央にあり、カマドの中心が搅乱を受け、火床部にまで及んでいる。袖部分は正面右側の部分がかろうじて残存し、構築の補強にあてた土器器窯が確認されている。遺物の出土は僅かで、住居東側に寄って出土している。

第4号住居跡は方形を呈し、カマド位置を中心とした主軸方向はN-13°-Eを示す。床面は平坦で全体に縛まっているが、特に硬化した部分は見られない。壁溝はカマド前面を除き全周する。ピットはP1が南壁寄りの中央部や東寄りで確認され、出入り口施設に伴うものと考えられる。カマドは北東寄りにあるコーナーカマドと捉えられる。カマド中央部分に支脚として使用したと考えられる石が立脚するが、被熱をさほど受けていないと見られる。遺物の出土は覆土中からのものが僅かにあるのみで、新山遺物が混入する状態である。

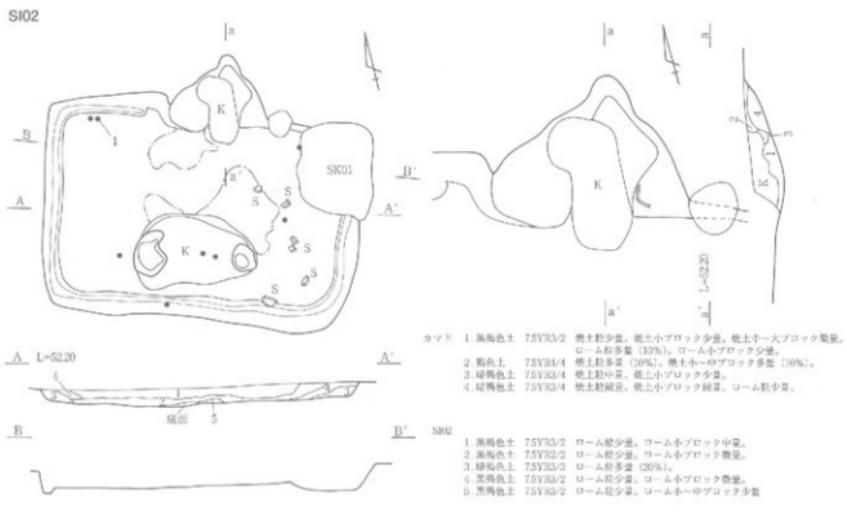
第6号住居跡は方形を呈し、カマド位置を中心とした主軸方向はN-14°-Eを示す。床面は平坦で全体に縛まっているが、特に硬化した部分は見られない。壁溝はカマド前面を除き全周する。ピットはP1が南壁寄りの中央部で確認され、出入り口施設に伴うものと考えられる。カマドは北壁中央と北東隅に2基確認されている。2基は新旧関係を伴うものと思われるが、北壁カマド前面に壁溝の痕跡が見られること以外は判断材料に乏しい。火床部は両カマドとも遺存が良好である。北壁カマドの正面左袖部分には、構築の補強にあてた土器器窯が確認されている。遺物の出土は、両カマド周辺の床面上に集中して見られる。一方、住居南側では覆土中から若干の細片が出土する程度である。南壁際やや西寄りの床面には、片岩の集中している部分が見られるが、その意図は不明である。

第7表 古代住居跡一覧表

遺構番号	位置 グリッド	平面形	主軸方向	規模 (m)			柱穴規模 (径・深さ cm)					火坑	貯蔵穴	焼粋
				東西	南北	高さ	P1	P2	P3	P4	P5			
第1号住居跡	E5・F5	方形	N-39°-E	2.92	2.91	0.23	-	-	-	-	-	カマド	なし	
第2号住居跡	E5	長方形	N-18°-E	3.87	2.67	0.21	-	-	-	-	-	カマド	なし	第1号土坑と重複。 本跡が古い。
第4号住居跡	G5・6	方形	N-13°-E	2.47	2.48	0.31	33・15	-	-	-	-	カマド	なし	
第6号住居跡	F5・G5	方形	N-14°-E	3.11	2.40	0.35	19・7	-	-	-	-	カマド	なし	カマド2基。作り替え。

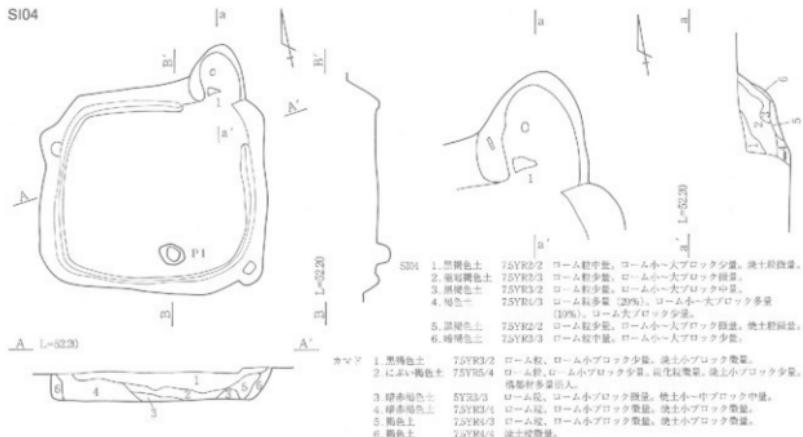


第 16 図 第 1 号住居跡



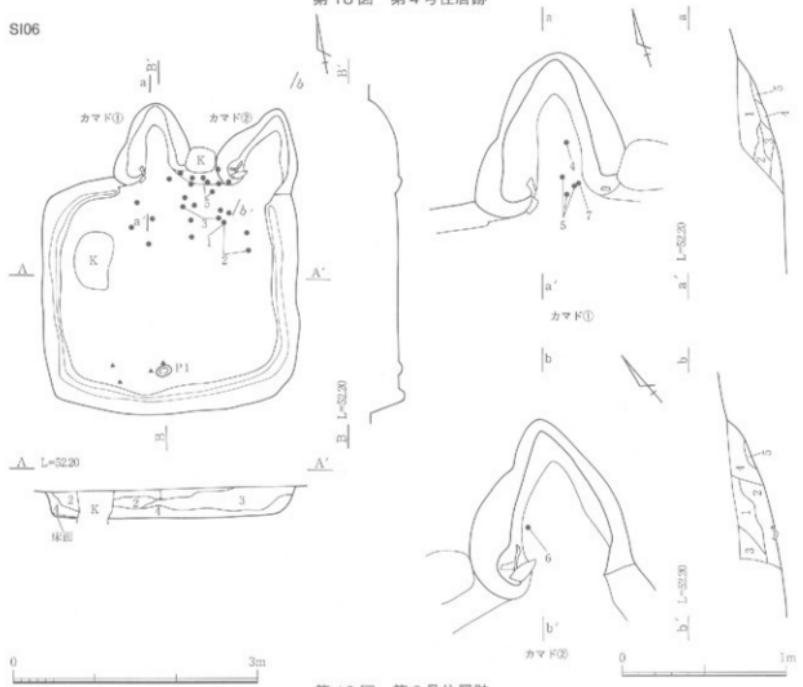
第 17 図 第 2 号住居跡

SI04



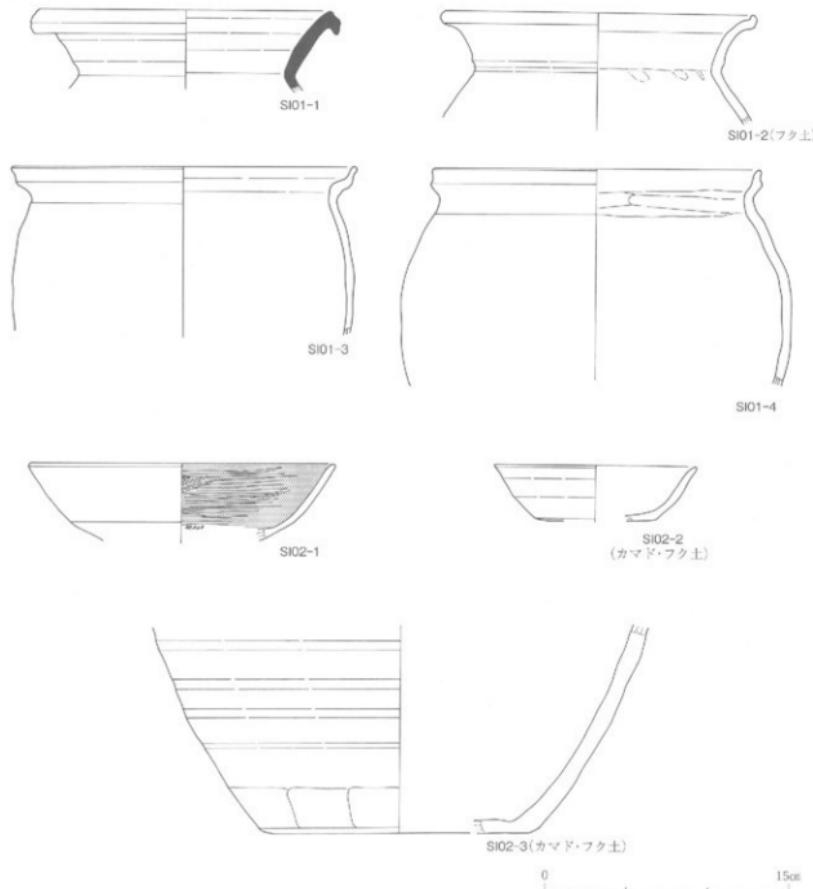
第 18 図 第 4 号住居跡

SI06

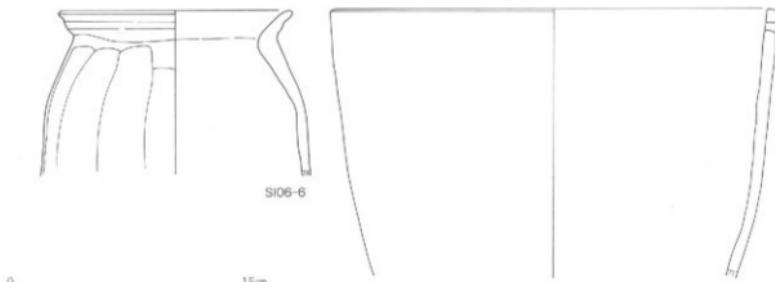
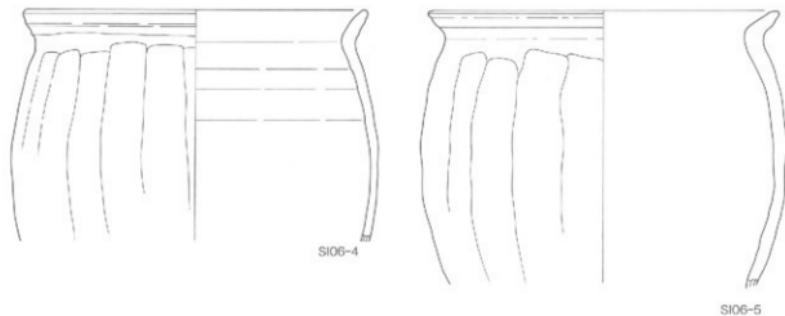
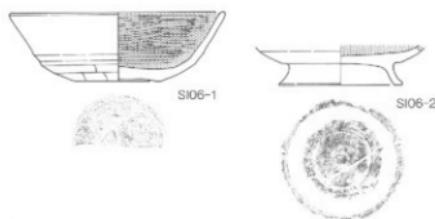
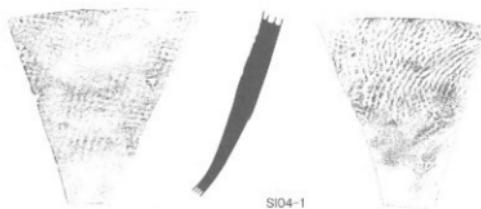


第 19 図 第 6 号住居跡

- S806
- 1 細褐色土 7SYR2/2 ローム程少量。
 - 2 黄褐色土 7SYR3/2 ローム程多量。ローム小ブロック少量。炭化物葉脈。植土粒葉脈。
 - 3 細褐色土 7SYR3/3 ローム程多量。ローム小ブロック少量。植土粒葉脈。植土小ブロック微量。
 - 4 細褐色土 7SYR3/3 ローム程多量。ローム小ブロック少量。
 - 5 細褐色土 7SYR3/2 ローム程少量。ローム小ブロック少量。
 - 6 細褐色土 7SYR3/4 炭化物葉脈。炭に相当。
 - 7 黄褐色土 7SYR3/2 保水。
- カマド1
- 1 細褐色土 7SYR3/3 ローム粒多量(20%)。ローム小～中ブロック多量(5%～10%)。炭と小～中ブロック少量。
 - 2 黄褐色土 7SYR3/3 ローム粒多量(10%)。ローム小ブロック多量(5%)。炭と小～中ブロック少量。
 - 3 細褐色土 7SYR3/4 ローム粒多量(10%)。ローム小ブロック少量。炭と小～中ブロック中量。
 - 4 細褐色土 7SYR3/4 ローム粒多量。ローム小ブロック少量。植土粒少量。
 - 5 黄褐色土 7SYR3/3 植土小ブロック微量。
- カマド2
- 1 細褐色土 7SYR3/2 ローム粒少量。ローム小ブロック中量。
 - 2 黄褐色土 7SYR3/3 ローム粒少量。ローム小ブロック多量(10%)。炭と小～中ブロック多量(5%)。
 - 3 細褐色土 7SYR3/3 ローム粒多量(10%)。ローム小ブロック中量。炭と小～中ブロック少量。
 - 4 黄褐色土 7SYR3/4 大粒多量(5%)。ローム小ブロック中量。植土粒多量(20%)。ローム大ブロック多量。
 - 5 黄褐色土 7SYR3/3 植土小ブロック微量。



第20図 第1・2号住居跡出土遺物



0 15cm

第21図 第4・6号住居跡出土遺物

第8表 古代住居跡出土遺物観察表

(cm)

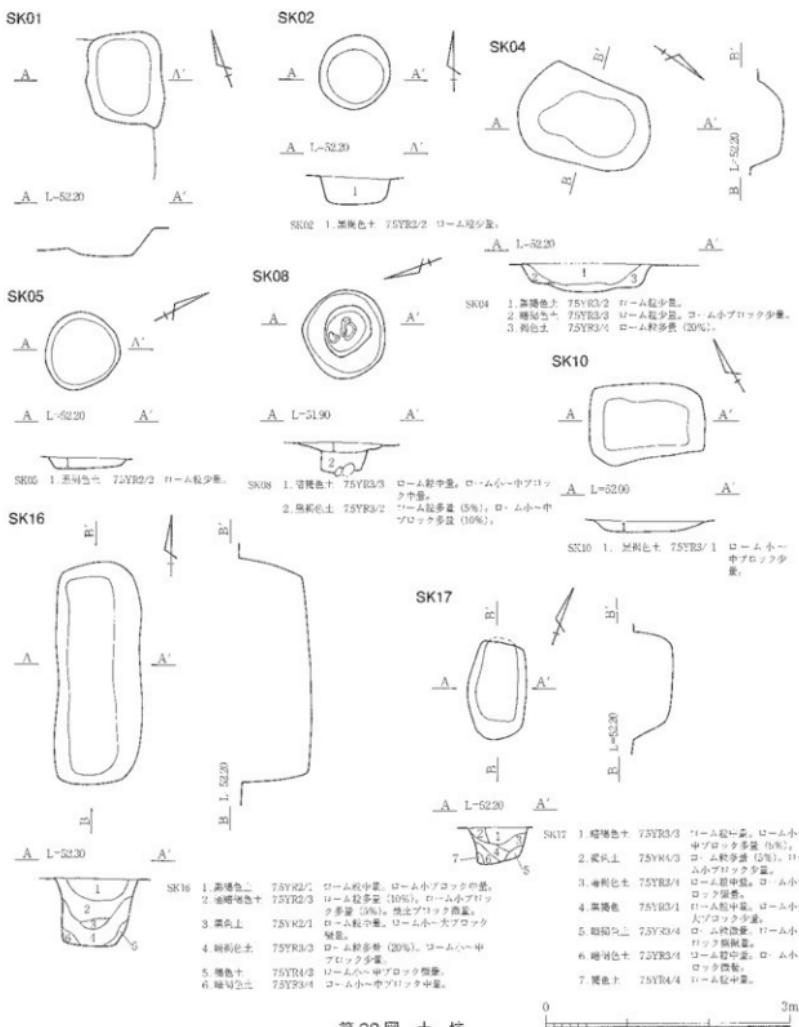
遺物番号	器種	法采: ①: 様 ②: 底序 ③: 高	胎土・色調・焼成・遺存度	特徴	備考
SI01_1	須恵器・壺	① (17.4) ② - ③ (5.0)	微砂粒・石英・灰色・良好・口縁部片		
SI01_2	土師器・壺	① (16.8) ② - ③ (6.7)	微砂粒・石英・褐色・良好・口縁部片	外面横位ヘラナデ。	
SI01_3	土師器・壺	① (20.8) ② - ③ (13.3)	微砂粒・石英・細繩・にぶい褐色・良好・口縁部片		カマド袖部出土。
SI01_4	土師器・壺	① (19.8) ② - ③ (13.3)	微砂粒・石英・細繩・にぶい褐色・良好・口縁部片	外面ヘラナデ。内面頸部ヘラ削り。	
SI02_1	土師器・壺	① (17.6) ② - ③ (4.7)	チャート繩・にぶい黄褐色・良好・口縁部片	外面体部下端ヘラ削り。内面黒色処理・磨き	
SI02_2	土師器・壺	① (12.4) ② (7.4) ③ (3.4)	石英主・体微砂粒・にぶい褐色・良好・口縁部片		
SI02_3	土師器・壺	① - ② (16.8) ③ (12.6)	瓦石繩・にぶい褐色・普通	外而ヘラナデ。底部下端ヘラ削り。	
SI04_1	須恵器・壺	① - ② - ③ -	長石粒・暗灰褐色・良好・口縁部片	外而ヘラ削り。内面同・心円にて其氣。	
SI06_1	土師器・壺	① (13.0) ② 5.4 ③ 4.2	長石含む微砂粒・にぶい黄色・普通・1/3	外而体部下端ヘラ削り。内面黒色処理・磨き	
SI06_2	土師器・高台付壺	① - ② 7.6 ③ (2.1)	白色粒・スコリア紋・燈籠・普通・底部片	内面黒色処理。	
SI06_3	土師器・壺	① (18.0) ② - ③ (20.8)	石英粒・チャート繩・明褐色・良好・1/4	外而ナデ。	
SI06_4	土師器・壺	① (20.8) ② - ③ (14.2)	石英粒・チャート繩・明褐色・良好・1/3	外而ヘラ削り。	カマド1袖部出土。
SI06_5	土師器・壺	① (21.0) ② - ③ (16.8)	其石粒・石英粒・チャート繩・赤褐色・良好・1/4	外而ヘラ削り。	
SI06_6	土師器・壺	① (14.0) ② - ③ (10.9)	微砂粒・にぶい褐色・良好・1/4	外而ヘラ削り。	カマド1内出土。
SI06_7	土師器・瓶	① (30.9) ② - ③ (16.7)	石英・角内石微量・にぶい黄褐色・良好		カマド2内出土。

第9表 土坑一観表

遺構番号	位置 グリッド	平面形狀	断面形狀	主軸方向	規模 (m)			備考
					長軸	短軸	深さ	
第1号土坑	E5	長方形	箱状	N-13°-E	1.11	0.93	0.09	第1号住居跡と重複。本跡が新しい。
第2号土坑	F5	円形	側底状	N-36° E	0.95	0.93	0.17	
第3号土坑	G5	不整形	不整形	N-83°-W	2.16	1.53	0.24	木根跡の可能性。
第4号土坑	G5	不整形精円形	跳底状	N-22°-W	1.66	1.13	0.29	
第5号土坑	F4・G4	円形	側底状	N 28° W	0.97	0.93	0.12	第5号住居跡と重複。本跡が新しい。
第6号土坑	F4	不整形	不整形	N-37°-W	1.98	1.48	0.53	木根跡の可能性。
第7号土坑	F4	不整形	不整形	N-61° E	2.58	1.50	0.44	木根跡の可能性。土師器片出土。
第8号土坑	F3	円形	箱状	N-61°-W	1.08	1.02	0.34	底面に露出土。1層目粗状を呈した別遺構。重複の可能性。土師器片出土。
第9号土坑	F3	円形	皿状	N-2°-W	0.97	0.91	0.08	
第10号土坑	D4・E4	長方形	皿状	N-62°-W	1.40	0.99	0.15	刷毛目調整の土師器片出土。
第11号土坑	F4・G4	椭円形	皿状	N-24°-W	1.34	0.83	0.08	
第12号土坑	G4	楕円形	皿状	N-9°-W	1.44	1.08	0.12	
第13号土坑	E4	円形	皿状	N-77°-E	0.84	0.78	0.13	
第14号土坑	E3	椭円形	不整形	N-54°-W	1.43	1.12	0.23	木根跡の可能性。
第15号土坑	F5	円形	筒状	N 4° E	0.45	0.36	0.16	刷毛目調整の土師器片出土。
第16号土坑	B2	長方形	箱状	N-1°-W	2.70	1.07	0.81	レンズ状上層堆積。土師器片出土。
第17号土坑	B2	長方形	箱状	N-22°-W	1.18	0.72	0.46	レンズ状上層堆積。土師器片出土。
第18号土坑	F2	円形	U字状	N 64°-E	0.86	0.76	0.12	第2号埴岡溝の一跡である可能性。土師器片出土。
第19号土坑	I3・C3	椭円形	U字状	N-60°-W	(0.89)	(0.85)	0.42	SU07と重複。本跡が古い。

4. 土坑

土坑は1区14基、2区5基、合せて19基が確認されている。規模等詳細については第9表に記した。形状は長方形を呈するものと円形を呈するものに二分される。不整形又は指円形のものは木根跡の入り込みが著しいもので本来の形状が不明瞭であった。

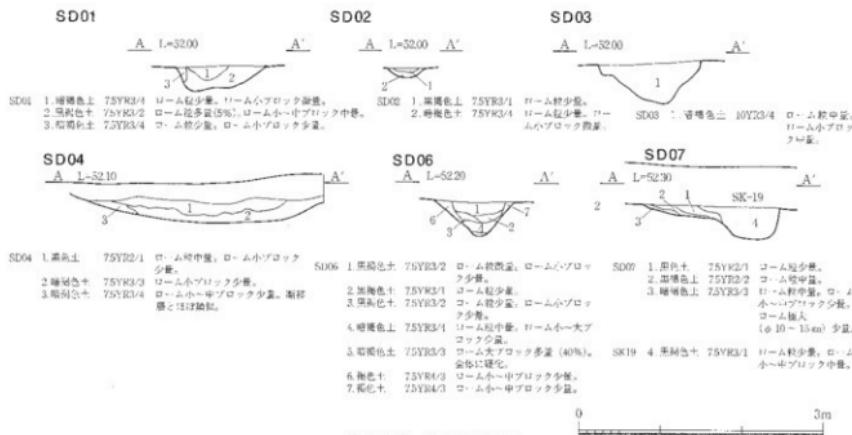


第22図 土 坑

5. 溝

溝は、1区4条、2区3条、合せて7条を確認する。詳細については第10表に記した。

第1号溝と第5号溝は配置関係から連続するものと考えられたが、第1号溝はカマボコ型、第5号溝は断面形状に断面形状の違いから別遺構と判断される。第2号溝は箱状で浅く、途中で消滅してしまう。第3号溝は1区調査区南側の擾乱地点を境にして走行するので、途中から消滅してしまう。断面の形状も不整形である。第4号溝は1区南東側で湾曲して確認され、今回調査の中では最も幅が広い。第6号溝は2区調査区の中央や北寄りを走行し東西の調査区外へ伸びる。断面形状はV字を呈するが、底面は3~6cmまで硬化した層が全体に見られ、道として機能した可能性もある。第7号溝は2区の北東端部で一部が確認され、湾曲した状況を呈する。出土遺物は、1号溝の上面から「寛永通宝」の古銭が表面採取された。第6号溝からは古墳時代前期から古代にかけての遺物が覆土上面から混在して採取され、須恵器片数点も見られる。



第23図 溝土層断面図

第10表 溝一覧表

遺構番号	位置 グリッド	断面 形状	走行方向	属性(m)			備考
				幅	長さ	深さ	
第1号溝	E3~5	箱状	N~70° W	0.89~1.37	(1390)	0.11~0.29	覆土上面で土師器片、古銭出土。
第2号溝	F3	箱状	N~23° E	0.58~0.75	(287)	0.11~0.24	
第3号溝	G4~5, H5	U字状	N 54° W	0.77~1.22	(1598)	0.06~0.26	底面が不整形。土師器片出土。
第4号溝	G4~6, H4	U字状	N 54° E	1.10~3.55	(18.00)	0.19~0.35	1区南東隅を湾曲して走行する。古墳闕構の可能性あり。土師器片出土。
第5号溝	E1~2	箱状	N 85° W	0.95~1.36	(10.00)	0.12~0.15	2号培塿溝と重複。本跡が新しい。道跡の可能性あり。土師器片出土。
第6号溝	C1~3	V字状	N 87° W	0.95~1.15	(14.35)	0.34~0.44	底面が硬化する。覆土上面で土師器片、知恵器片出土。
第7号溝	B2~3	U字状	N 25° W	0.83~1.53	(3.30)	0.14~0.38	2区北東隅にかかり、湾曲を呈する可能性。

VII.まとめ

今回の発掘調査にあたって事前に実施した試掘調査では、トレンチ内で確認した住居跡8軒を主体とした集落跡とした。本調査を行った結果、堅穴住居跡7軒（古墳時代前期住居跡3軒・古代住居跡4軒）を検出したほか古墳2基を新たに検出し、集落跡とともに本遺跡が古墳群としての性格を有した遺跡であることが判明した。今回検出された古墳2基は、1・2両調査区にそれぞれ位置し、調査区の東西両端に寄って検出された。2区北端から約50m北側の真岡鉄道線境界に接した地点に遺存する墳丘と合わせて、板堂遺跡一帯が古墳群としての機能をもつた遺跡であると確認された。

古墳について

調査を行った古墳は2基とも墳丘が失われ、周溝及び主体部の確認のみとなった。調査した2基の古墳を比較してみると、周溝から見た古墳の規模は第1号墳よりも第2号墳のほうが大きいが、さほど差がないことから同クラスの者を埋葬したものと考えられる。主体部は両古墳とも川原石小口積みの横穴式石室であったと考えられる。石室は長方形・箱形の掘り方内に小口積みした石の嵌込みとして灰白色粘土主体の土が用いている点や、規模、床下から石積みの底底部となる掘り込みが施されている点は共通するが、内部では、床面が第1号墳は扁平な石を用いて構築しているのに対し、第2号墳は玉砂利的な小礫を、小さめのものは下部、大きめのものは上部と2層に分けて構築している点、出土遺物が、第1号墳では刀子2点が出土した以外は玉類がまったく出土しなかったのに対し、第2号墳では玉類、耳環といった装身具類のみの出土であったことなどの差異が見られた。また第1号墳では、石室北側の床上に川原石を高く積み上げて石枕の機能を有した部分が見られるが、第2号墳では石室北側が風倒木痕による擾乱で失われているため同様のものは確認されなかった。

第2号墳出土の玉類について見てみると、出土した玉類は32点で、管玉、蚕玉、臼玉、小玉、丸玉がそれぞれ出土している。その内最も多いのはビーズ状のガラス製小玉で21点を数える。色調は青を基調とするが、これらは青緑色系と群青系に分類され、さらに青緑色系の中には不透明なものが含まれていた。群青系は基本的に透明であるが、やや透明度に欠ける。丸玉は土製で2点出土している。その内1点は表面に漆による繪装がなされ、もう1点も形状が類似することから同様の処理がなされていたものと思われる。臼玉は滑石製で1点出土している。丁寧に磨かれて光沢をもち、一連の玉類と同様、装身具として用いられたものと捉えることができる。

住居跡について

本調査区で検出された住居跡は古墳時代住居跡3軒、古代住居跡4軒である。

古墳時代の住居跡は全て炉を伴う住居跡で、台地南側縁辺部に近い1区から2軒、西側縁辺部に近い2区北端で1軒が検出されている。規模は第5号住居跡が最も小さく、第7号住居跡は1辺が6.7m前後と比較的大型である。第7号住居跡では貯蔵穴は確認されなかったが、第3号住居跡の配置とほぼ一致することから調査区外に貯蔵穴があるものと推測される。出土遺物をみると、第3号住居跡から出土した粗製器台は脚部の内面を除き赤彩が施されている。第7号住居跡からもほぼ同型のものが出土しているが、こちらはL1唇部を摘み上げているのが特徴である。複合口縁壺は第3号住居跡で2点出土し、1点は丁寧な磨きが施された小型壺で、口縁が外側に開き脚下部に穿孔を有している。もう1点は貯蔵穴内から出土した複合部幅が広いもので口縁が外反している。第5号住居跡から出土した複合口縁壺も複合部幅が広いものであるが、こちらは口縁がやや内湾し、非常に大型である。また第3号住居跡からは脚部下膨れの壺が貯蔵穴内から出土し

ている。高坏は、坏部下部に稜を有するものが第5号住居跡から出土している。脚部は欠損するが、接合部が小さく柱状を呈したものと推測される。逆に第7号住居跡から出土した高坏は棱を有さず、脚部もやや開き気味になると思われる。器台は第3号、第5号の各住居跡で小型のものが出土しているが、第3号住居跡の器台(SI03-1)は、第5号住居跡の器台(SI05-2)と比して受け部が大きく、脚部も聞きが抑えられていることから、小型高坏の様相を呈している。甕は、小型台付甕、單口縁甕が第5号住居跡から出土している。第3号住居跡からは在地的な様相を呈した口唇部外面に刻み目を持つ甕が出土している。鉢形土器は第5号住居跡から底部に木葉板を有する小型鉢形上器(SI05-1)が出土し、第7号住居跡からは頸部に折れをもつ中型サイズの壺(SI07-1)が見られる。これら遺構の形態及び出土遺物から、第3号、第7号住居跡は4世紀前半に位置づけられ、第5号住居跡が後続する4世紀後半の住居跡と考えられる。

古代の住居跡は全て1区東側から検出されている。各住居跡は1辺が2.4~3.0m以内とほぼ同規模の小型で方形を呈しているが、第2号住居跡のみが東西に長い長方形を呈している。全て住居の北西隅にカマドを有しているが、第2号住居跡は長方形という形態からか、やや中央に寄って検出されている。出土遺物は、いずれの住居も出土量が少なく限られた資料での考察となった。坏及び甕の形態を主体を見ていくと、第1号住居跡では、口唇部を摘み上げた甕が見られ、一部カマドの袖部に利用されているものも出土している。カマド付近で出土した須恵器甕は、口縁部を下方に折り返したもので蓋子廻所窓と考えられる。第2号住居跡では、やや大き目の内面黒色処理された坏が見られる。第6号住居跡では、内面黒色処理の坏、高台付塊が出土しているほか、甕は聞いた口縁部に口唇部の摘み上げが消滅し、表面がヘラによる継削り調整を施しているものが主体となっている。これら遺構の形態及び出土遺物から、第1号、第2号住居跡が9世紀中葉から後葉にかけて、第6号住居跡は9世紀後半から10世紀前葉にかけての住居跡と考えられる。

尚、第4号住居跡は図示し得た遺物が須恵器制部片の1点のみであり、時期決定できるものは出土しなかつたが、遺構形態から推測すれば、第6号住居跡に近いものと考えられる。

溝について

1・2調査区で合わせて7条の溝が検出された。第1・3・5・6号の各溝は、東西に走行するものであるが、第4号溝及び第7号溝は湾曲を呈し、断面は船底状でレンズ状の堆積層を呈することから、古墳の周溝の可能性がある。第7号溝については2区の北東端部にはんの一部が確認されているに過ぎない。一旦分離しているものの両端の土層状況から一連の遺構と判断され、断面及び上層堆積状況が第1・2号墳の周溝と類似することから、第4号溝同様、古墳の周溝の可能性が考えられる。分離しているのはブリッジ部分にあるためとも考えられる。

参考文献

- | | | |
|------------|-------------------------------------|------------------------|
| 真岡市史編さん委員会 | 1984『真岡市史』 | 真岡市 |
| 青木健二ほか | 1989『上原古墳群』 | 日本産業史研究所 |
| 三輪孝平ほか | 2000『坂上北原遺跡』 | 日本産業史研究所 |
| 福田定信ほか | 1988『板塙古跡群発掘調査報告』 | 小山市教育委員会 |
| 森谷昌良ほか | 1986『小栗地内遺跡群発掘調査報告書』 | 嵐和町小栗地内遺跡調査会 |
| 古代生産史研究会 | 1997『東国の須恵器』関東地方における歴史時代須恵器の系譜 | 古代生産史研究会 |
| 奈良・平安時代研究班 | 1991『8世紀末～9世紀前半の器種構成について』[研究ノート第1号] | (財)茨城県教育財團 |
| 奈良・平安時代研究班 | 1992『9世紀後半の器種構成について』[研究ノート第2号] | (財)茨城県教育財團 |
| 奈良・平安時代研究班 | 1993『10世紀後半の器種構成について』[研究ノート第3号] | (財)茨城県教育財團 |
| 橋本博文 | 1981『柳山古墳出土玉類をめぐって』[常陸柳山古墳] | 大洋区教育委員会 |
| 藤原祐一 | 1995『臼玉試論』[研究紀要第3号] | (財)茨城県文化振興事業団埋蔵文化財センター |
| 中村守史・内山俊之 | 2005『丁子野の古墳群事務所』[月刊考古学ジャーナルNo.535] | ニューサイエンス社 |
| 鈴木容子 | 1977『霧西の古墳出土の玉類について』[講西] | 木本謹市霧西遺跡調査会 |



1. 1区全景（北東から）



2. 2区全景（北から）

PL 2



1. 第1号墳全景（南から）



2. 同 主体部確認状況（北から）



3. 同 主体部全景（西から）



4. 同 主体部全景（南から）



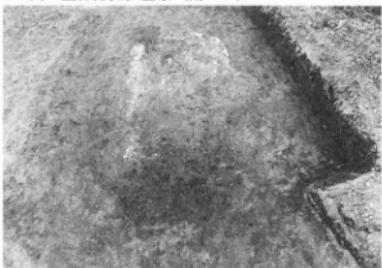
5. 同 主体部側壁断面



6. 同 主体部完掘全景（南から）



7. 第2号墳全景（北東から）



8. 同 主体部確認状況（北東から）



1. 第2号墳主体部全景（北東から）



2. 同 主体部遺物出土状況（南東から）



3. 同 主体部遺物出土状況（西から）



4. 同 主体部完掘全景（北東から）



5. 第3号住居跡全景（南から）



6. 同 遺物出土状況（南から）



7. 同 遺物出土状況（南から）



8. 同 貯蔵穴内遺物出土状況（西から）

PL 4



1. 第5号住居跡全景（南から）



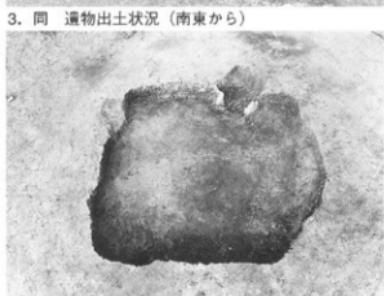
2. 同 遺物出土状況（南から）



3. 同 遺物出土状況（南東から）



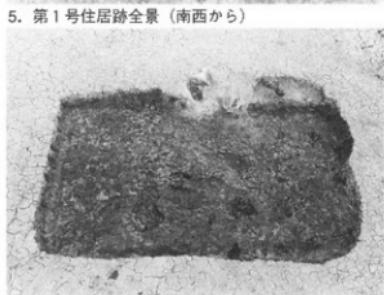
4. 第7号住居跡全景（南西から）



5. 第1号住居跡全景（南西から）



6. 同 カマド近景（南西から）



7. 第2号住居跡全景（南から）



8. 第4号住居跡全景（南から）



1. 第6号住居跡全景（南から）



2. 同 遺物出土状況（南から）



3. 同 カマド① 近景（南から）



4. 同 カマド② 近景（南西から）



5. 第8号土坑全景（西から）



6. 第16・17号土坑全景（南から）

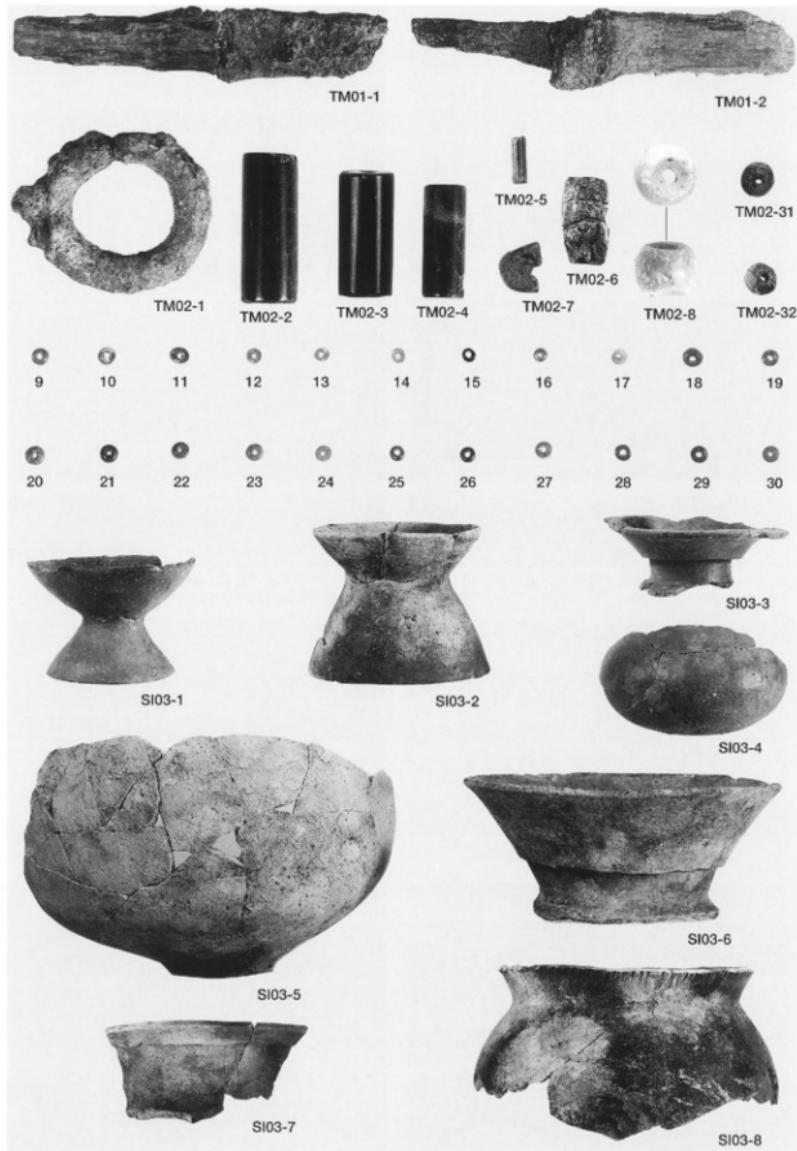


7. 第3・4号溝全景（西から）



8. 第7号溝、第19号土坑全景（西から）

PL 6

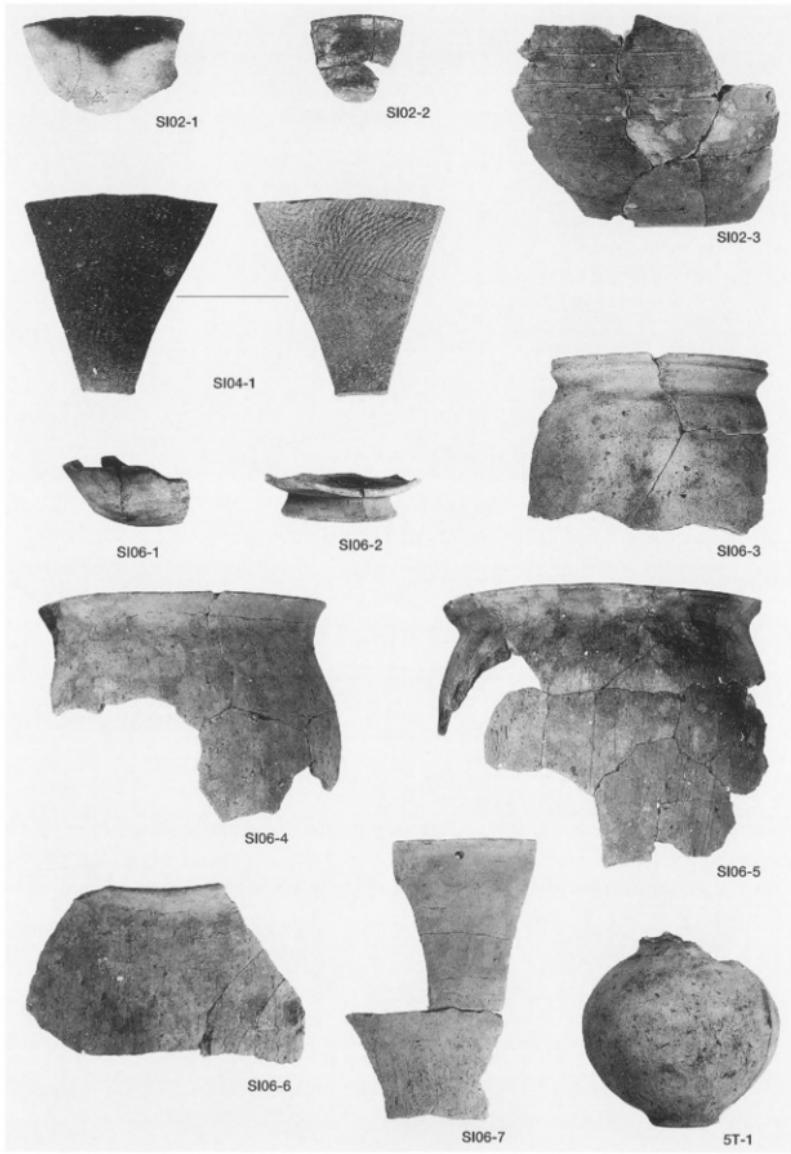


出土遺物 1



出土遺物 2

PL 8



出土遺物 3

抄 錄

ふりがな	いたどういせき						
書名	板堂遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	高野浩之						
編集・発行機関所在地	筑西市教育委員会 〒308-0021 茨城県筑西市甲 862 番地 1 Tel 0296-22-0183 山武考古学研究所 〒286-0045 千葉県成田市並木町 221 番地 Tel 0476-24-0536						
発行年月日	2006年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村遺跡番号	。°'	。°'		m ²	
板堂遺跡	茨城県筑西市板堂 536-2,539-1, 540-5	206073	36° 21' 12"	139° 58' 12"	2005.09.05 ~ 2005.10.03	1,594	工場施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
板堂遺跡	古墳 集落跡	古墳時代 古代	堅穴住居跡 古墳 土坑 溝	上飾器、須恵器、砥石、耳環、 刀子、玉類（管玉・糸玉・臼玉、 小玉・丸玉）	古墳2基検出。		
要約	遺跡内で古墳群の所在が明らかとなる。						

資料の取り扱いについて

項目	内 容
水洗い	・出土遺物全てについて行った。
注記	・インクジェットプリンターを使用した。 ・遺跡略号(ITA)・検出遺構(ST:住居跡・TM:古墳・SK:土坑・SD:溝)・出土地点(Na、フク土、表探)を注記した。 ・上部標片については、同様の内容を明記したビニール袋に収納した。
復元	・接合は接着剤を用い、出来る限り行った。
実測	・出土遺物は実測・トレース・版組みを作成し、報告書に掲載した。
台帳	・圓面台帳、遺物台帳、写真台帳があり、それぞれの資料が検索可能であるように作成した。
出土遺物 収納状況	・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、未使用遺物は台帳記載遺物とその他の遺物に分けてコンテナ・あるいはダンボール箱に収納した。各箱には箱番号・収納内容を明記した。
資料の保管場所	筑西市教育委員会

茨城県筑西市

板堂遺跡

発掘調査報告書

印 刷 平成18年3月25日

発 行 平成18年3月31日

編集・発行 筑西市教育委員会

印 刷 山武考古学研究所

株式会社文化総合企画

TEL.0476-93-0593